

〈資料紹介〉翻刻『聖徳太子職人鑑』(一)

翻刻の会

- 一、底本には早稲田大学坪内博士記念演劇博物館の七行一〇二丁本を用いた。イ一四一〇〇〇二一四〇一。
- 二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。
 - 1 本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類、会話の途中等では改行しなかった。
 - 2 各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を()で示した。
 - 3 仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。
 - 4 漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。
 - 5 漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。
 - 6 特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。
 - 7 畳字は、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ゝ」、漢字は「々」に統一した。ただし、「く」はそのまま残した。
 - 8 文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。
- 三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会(学部学生の研究会)の会員によってなされた。

太田諷実、釜丸祥、酒瀬川なおみ、柴田紘孝、西有幸、布施あかり、吉村仁志、梅岡陽菜、小倉彩、奥野瞳、川上智大、谷口悠、米山そよぎ、井上瑞月、上久保咲穂、小夏珠々花、鶴岡里菜、林田珠加子。

(山田和人)

聖徳太子職人鑑 (一)

豊竹肥前掾座

桂陽山陵けいようざんりやうの大樹たいじゆ。歳霜さいそう幾いく旧誰いにしへ誰たれかしらん。根本こんぽん十围じゆゐに余幅よはふし。枝葉しやう天てんを覆おほふ暗くらく。樹下じゆがに檀洞たんどう有あつて。懐声わいせいを発はつすと云々うんぐん。是こゝを斫きつて農業のうげうを助たすけ。是こゝに隠かくれて民たみを導みちびけり。道みち。草木くさく。国土こくど皆みな仏生ぶつじやう。誓ちかひに洩もれぬ教路けうじゆの。中なかに和わらく日ひの本もとのヲロシろしへ歌うたの道猶みちなほ。神かみの道みち。古例これい古格こかくに政まつりごと。おこたらず用もちひ明あらかにおはしますを。用もち(一オ)明天皇めいてんかうと申まを奉たがり。大和やまとノ国くに飛鳥あすかの郷がうに大内裏おほうちをうつし。主上しゅじやう広庇ひろびに出給いへば。中臣なかつひの勝海かつうみの臣おみ仁義にぎぎ礼直れいぢくの冠かぶりおだやかに。補佐ほさのかたへは守屋もりやの大臣おほしが叔甥しゆくせいの交まじはりに。權威かういの鬚くちほし羽はをのばす鳥取とりノ熊人くまんど。其外そのほか無数むすうの百官ひやくくわん百司ひやくし威義ゐぎを。正ただして相詰あひまらる。帝みかど勅みかどちやく有りけるは。今度いまど新羅しんらの国くによりも貢みつぎの序ついでに送つつたる。釈しやく氏の經論きやうろん太子たいし甚是きんに帰依きゐし。彼地かちより来朝きやうてうせし豊国ほうこく聖せいといふ僧そうに因よみ。向原むかほらに先達まはしやて坊舎ぼうしやを營いとなみ。日ひ(一ウ)を追おつて供養くやうなさんとの事こと。蘇我そがの馬子まごノ大臣おほしは先年せんねん異国いこくへ入唐にうたうし。今いまに生死しんじの沙汰さたも聞きかず。小野おの、妹子いもこの大臣おほしは天命てんめいを履おほふ齡よわひに傾かたむき。参内さんないもはかどしからず。勝海かつうみ熊人くまんど両臣りやうしんの評義ひやうぎいかにと宣のたまへば。中臣なかつひの臣謹つゝしんで。此こゝ菅原うすはらの味国あじくには日に近ちかき陽国やうこくにて。人ひとノ氣きさかんにつるを歎なげき。西域さいいきの仏ぶつの教民けうみんの心こゝろをなづるの道理だうり。今いまに始はじめメぬ太子たいしの智徳ちとく。申まをスも愚おろかに候まをと述のべらるれば。兼あひまて守屋もりやと合あつた熊人くまんどは空あうそふき。挨拶あいさつの期ごも杉まの戸この引手ひきての音ねのからめきて。立出た給たふ聖徳太子せいとくたいし。(二オ)雲うの鬢面びんづらすき通とほる御衣みゐに引ひかへ三衣さんゐの姿すがた。神かみの御末みすへの忝かたじけなき衆生しゆじやう。濟す度の柄香へいかう炷たづさへ。末世まごころに残のこる御出立みでた十六才じふろくさいの御像みかたち。守護しゆごのわつばは調子てうし丸白まるはく張ちやうまたふて錦にしきの袋ふくろ。うやく敷し捧持ほうぢ。御階みはしの下したに蹲踞そんそすれば。公卿こうけいの面おもて々思しはずもはつと。冠かぶりを傾かたむけらる。太子たいし御声みこゑうるはしく。丸まるが兼あての望のぞみみの伽藍がらん大方おほ方に成就じやうじゆし。供養くやうも程ほどなく候まをよし。匠司たくみづかが告知つげラせ。暫しばく彼地かちに立越た申御まを

暇の参内。又有レ成童に持せしは二才の春。南ノ殿にて不思議に得たる名玉。此度此土へ渡られし豊国聖の閲せられて。釈尊の左眼の舍利と承はり。剛金寺へ納メ申さん我心。旁出家の(2ウ)因縁深けれ共。父の誠強ければ姿計の仏恩報謝。うばそくの本体は寺への申訳。叡慮安クと仰の内より。鳥取り熊人す、み出。唯一の神ノ国正しひ神の正統を受ながら。異国の売主を尊達仏とやら経とやら。尊ムすべは存せぬ。夫レに何ぞや太子の詞を敬へば。下々にいふ子に迷ふ親心と。官位をせしめるお髭の塵。此熊人は吞込ぬと。あて付られて勝海ノ臣につこと笑ひ。唯一の神道も仏の和らぎ有ざれば。此地気の人心邪を鎮給ふが。貴方の心に入ぬよのふ。アいかにも入ませぬ君賢聖を行ふ時は天下にれいぎよ空敷とて。民百姓の邪も政さへ正しければ。おのづと(3オ)しづまる世の習と。横紙破りの我儘論義。愚者に向つて返答なき。太子は言句も出し給はず。物にこらへぬ調子丸白洲より延上り。イヤア熊人様。主君太子に云ハぬ計人もなげなお詞。釈迦入滅より程過て正像末の三三時の末。末法は今の世界君臣父子の間々に限らず。志に剣をとぐ内心の邪欲を払ふ仏法。一通りの思召は。却て未熟と。いはせも果すヤア慮外な下主め。うぬが持しは彼仏舍利とな。天竺の人の骨。内裏の穢そこ立と。見くだす眼にちつ共ひるまず。互に詞もあらく敷詰かけくすがるの柄も碎る計握り詰て(3ウ)いとみ合。

太子勝海諸共に玉座近しと有りけるにぞ両方ハツト扣へるる。

帝重ねて宣はく。熊人は神国の氏の恐れを思ふ詞。舎人は又主命を重んずるしほらしさ。何れもるこんに思ふべからず。太子は片時も向原へといともかしこき宣。調子丸を召供して向原へさして詣らる。

暫く有て神器の官人あはた敷参上し。築地の影の小門より忍び出立の曲者二人。三種の神器の御唐櫃。盗ミ出して奪あふ

有様。宿直とのゐの者共相さゝへ候得共。二人共に手ごはく働はたらき御宝を奪うばひ取。なんなく落失候と息たつぎあへず訴うふれば。諸卿一度に驚おど天てんし。眉まゆをひそむる計也。

天皇甚驚おどかせ給たまひ。歡慮えいりよくる（4才）しき御物ごごし。聞捨きならぬ一大事。公卿残あらず召集あつめ詮義せんぎに心ゆだねや。三種の神器じんぎふんじつ紛失ふんじつとは。天照あまてらすす太た神。朕ちんが不徳ふとくを憎にくませ給たまふか。守屋もりや妹子むすめは有あざるやと。ねびさせ給たまふ御気色みきれんにて御簾みすだ。さつとおりにける。

斯これと聞きより妹子むすめノ大臣馬道めだう伝つたひに欠付か給たまひ。三種の神器じんぎふんじつくれに失あさせ給たまひしと。庁官ちやうくわんの知しラせによつて。取とあへず参内さんないせし。諸卿しよけい残あらず揃そろはれしか。両臣りやうしん君きみの歡慮えいりよはいかにと。の給たまふ折をから守屋もりやが郎等らうとう縣あがたの虎純こじゆん。異国いこく人ひとに繩なわをかけ白洲はくしゆに引ひすへ謹つつしんで。主人しゆじん守屋もりやが領地りやうち順見じゆんけんの帰かへるさ。難波なんばの浦うらに怪敷あやし小船せうせん。心こころへずと中なかつを改見かへる所に。案あなに違たがはず異国いこくの者もの。詮せん（4才）義ぎをとげて候まをへば。懷中くわいに此一こ巻まきと。階下かいかより差出さしだせば熊人くま取上とさらくと押披おしひらき。何々なに百濟王はくさいに一味いまいし。仏法ぶつぽうにこと寄せ民百性たみひやくせいをなづくる条じょう。唐土たうど日本にっぽん一つにして百濟王はくさいへ奉ほうる。宛名あてなは太子たうじ。蘇我そがノ大臣馬子めしよが自筆じひつ。謀反めうはんの有増書翰あらししよかんの面おもて。人々ひと恟びつり是こゝはと計リはかり一座いざ。しらけて見みへにける。

サア最早さいさうあらがふに及およぬまつ直ただにぬかそうと虎純こじゆんにしめ上あられ。ア、待まちたく。露頭ろけんの上うへは包つまふ様さまなし。某あつは雲玄清うんげんせいと申まをて百濟王はくさいの臣下しんげ。此土こゝの一味聖徳太子せいとくたうじへ忍しのびの使つかひ。仏法ぶつぽう執行しゆぎやうに事寄ことよせ民百性たみひやくせい過半くわはん一味いまいに従したがへ。三種の神祇じんぎを請取けいやく契約けいやく。入い唐たうの馬子ばしよノ大臣だいじん近々きんじん唐土たうどより。日本にっぽんへ押寄おしよる手筈てはざんの内通相ないつうさう（5才）違たがはずと。詞ことばのはしどく各おのあきれる二度恟びつり。動どうぜぬは妹子むすめノ大臣だいじん。住昔わうこよりも三漢さんかんは風俗物ふうぶついひ殊ことに委くはしく。国史こくしに見みへしと相違さういして。詞ことばの端面はしづら魂たましい。儕せいには詮義せんぎが有あと。ずん

ど立て直垂ひたれの袖はまくり上。階うをおりる間あらせばこそ。榎書殿かうしとんの妻戸つまどより絃音つるおとひいてあばらをかけ。はつしと射みぬく尖とがり矢一筋。うん共あすん共雲玄清。矢フシにはに息の根絶たへ果たり。

思地色ウひがけなく公卿げうてんの仰天げうてん。見ウゆるこなたのしとみ影。謀反つ一味の太子ちの方人。朝敵討取あル血祭ちまじりよし。心地ちよしと。殿地ウ中にこたまして村重藤むらむねの弓手ゆづ挟まみ。のつさくと守屋ウノ大臣ち人を恐おそれぬ騎慢きまの。鬼髭おにひげ左右さゆうにかき乱みだし。きやう紋もんの直垂ち（5ウ）ゆ、敷立フシ出れば。

妹地色ウ子色大きにせき立給詞ひ。詮義せんぎの残る雲玄清殺害せつがい有し守屋ウの所存。いぶかしさよと有ければ。守屋ウの大臣ちからくと笑わひ。三種さんしゆの神器ふんじゆ紛失ふんじつと聞きより。寄合公家よろあひにも油断ゆだんならずと忍しのびの参内さんない。虎純こじゆんが計はかひにて太子ちの謀反つ顛たれし慥しやうな証しやう拠こ。うすにして科極しやくごくた雲玄清。暫しばらくも捨置すてては政道せいだうがかける。夫おとこレ故臣ここじんが射やころすと帝みかどに奏聞そうもん遂つひての成敗せいばい。助すけケ置おたふ思おもはる、其方そのかたも太子ちの味方あいきか。サア返答へんたうはと熊人くまじんもろ共話あかくれば妹ち子こノ大臣ち馬子まこノ臣しんか渡唐わたたうの安否あんひ誰たれか尋たずし者ものもなく。異国内通いこくうちうの実否じつふも糺たさず。太子ちに悪名付奉あくなづけほうり後日ごじつに誤あやなき時は。（6オ）我國わがくにの誤あやを唐土たうど迄いたへる道理だうり。イヤサ証拠しやうこは其内通そのうちう。イヤ内通うちうは証拠しやうこに成ならぬ。イヤ推参おしさんと眼まなこに角善かくぜんと惡わるとは裏表うら顔かほは庭火にわびと争あふ中。勅諭ちよくちゆ有りとあへやかに。御引声おんいんせいも。顔かほばせも。玉世たまよの後のちと聞きへしは帝みかどの閨なの花紅葉はなこうえつ。しとやかに立出給たひ。帝様みかどさまの勅諭ちよくちゆには兩人ふたりの諍しやうひも皆朝家あしたけをば太切たきに思おもはる、神妙しんべうさ。妹ち子こノ臣しんは三種さんしゆの神器ふんじゆの有家うけを求もとめ。早々はやはや内裏うちへ守奉まもほうる謀はかりごとをめぐらされよ。太子ち謀反つに極たぎまらば王孫わうそんとて用捨もちなせそ。守屋ウ実父じつふを正ただされよ。双方ふたう共あにしめし合取計あひあひとの勅諭ちよくちゆと。有あの儘成ままル詞ことばつきハツト両臣領りやうしんりやう掌てのひらの。中ちに玉世たまよの青柳あおやなぎの風かぜに（6ウ）もつる、守屋ハルの大臣ち。そこゐの恋こひを押包おしみねがらむ木きを切小野きりこの、臣しん。妹ち子こ勝海かたみ思慮しりよ深ふかき欲ほの熊人くまじん爪立つまた立たる。虎純こじゆん共あに善惡ぜんあくの邪よこしま

正一致を今爰に。わかつも愚痴の下々衆生。かつがうさする方便を。筆にあやなき御仏の。おしへの。程ぞ三重へ道広き。春は気色も。うらゝかに。目立娘の綻びは。三五の玉の。顔だちの。おぼこ育のかは取て驚興丁。跡につくくし嫁菜の名さへ羨し。父の守屋に似も付ぬ鬼も見とれる品照姫。振のかづきのかいぞへは生駒といふてりんくくと。目のさやはづさぬ才発者。姫中居付々の年も古瀬の局迄皆打こんじた野遊びは。外珍らしき道草や。

土手のかたへに立どまり。古瀬の局(7オ)かさ取ッて申々お姫様。野遊びならわつさりと。若草山か三笠山の気色がいつちよからふに。こんな所のお物好。お姫様もお姫様と。ふせうぐな仏頂顔。姫君はおとなしく。自がけふの遊びは心願ンが有ての事。皆のしんどに気も付ず尋なんだはわしが誤り。コレ必しかつてたもんなやと。愛にこぼるゝしとやかさ。夫なれば御尤是々侍衆お乗物はそこに置。跡の松原で休息しや。こりや有難いと打連て松原さして急ぎ行。

跡に姫君娵共。待に恋路の。引綱や。君のゑい慮は淵と瀬に。替ると知ラズ飛鳥より。白衣の袖も調子丸。太子を供奉し參らせて。仏舍利捧げ志づくくと繩手。伝ひに来かゝれば。

品照姫は太子の顔ばせ。(7ウ)見る中胸にびくくくと。我恋人とおもはゆき。思ひを汲取生駒も俱に。せん方もなき目遣ひは兼て調子と結び合。互の顔に物いはす。

傍に古瀬がきよろく眼。ねれけ者の調子丸。コレく女中方。今きた道の片岡村で陸尺衆と侍衆。五六人が仲間喧嘩。つかみ合て居らるゝぞへ。若シこな様方の御家来衆じやないか。ア、笑止な事といふに古瀬が。ヤアそれは何事を云いつつた。お忍びの御参詣きよじが有てはおれが立ぬ。テエ一ト走生駒殿姫君様頼むぞやと。尻をふごく。欠て行。

影見^{地色}送て三人は。ぬれのこんたん姫君^{ハル}の。得ならぬ恋のはし渡し。秘共^ウに生駒^ウが目ませ。立よつて調子丸^{ハル}が胸ぐらほうどコ
レ男。太子^詞（8才）様へ姫君からこな様頼んでお文の取次。ヲ、合点じやのイヤよい様にする〜と。ながふ成程引ずつて。
怪我^{ハル}なこうとの返事のないは。お姫様へわしが立タぬ。けふほどの道お返事を。聞ク切気で待っていた。いやか応か^{おう}の返答次
第^ウこちの覚悟^{かくご}は極て有。サ、どふじやく〜と振廻^{アツマ}されマア〜とつくりとト通りいふて聞そふ。何がそもじに頼れる
とひにち毎日。口のすふ成程いふても。イヤ仏法頭痛^{づつう}とやらの妨^{さまたけ}じやと。却^{かへつ}て大キにお呵受^{しかり}。其後云出す事も成ラぬ
上々はうへ〜の直相對^{じきあひたい}。ナアレ。直々の了簡^{りやうけん}が有そふな物じやぞや。サアわしもそふは思ふけれど。サけれどでは済^{すま}ぬ
はい。ひらに〜とせき立調子^ツ。生駒も心せは〜敷。お氣のよは（8ウ）いも事に寄ル。お直^ウの返事聞切ツたがよいと。
太子のお傍^{そば}へ突^つやられ。顔は紅葉^{ハル}の品照姫^中。度々の水ぐきに情いなせの御返事^ウも。つれない君^{サハハル}が心^{ハル}ばせ。こがれ死^しよりたゞ
一言。恨み^{うら}いふ気で待ッていた。ついでうとじやとのお詞を。聞^ウして給^{クル}はれ聞してと。けさに取付泣涙^ウ御手^ウに持し水晶^{すいしやう}の。
珠数^{しゆすう}の乱る、ごとく也。

君はとかふの御いらへもつれなふも宣^{のたま}はず。切^ウツ成心^{フシ}かんじ入。とくに返事と思へ共^{しやくそんきやう}積尊給仕^じの暇なき身。我大願^ウ満ざ
る内かたらふ事は叶ぬ〜。重^チねて詞無益^{むやく}ぞと仰^ウにがつくり力落^ち。事^{ハル}を分ての御詞^ウ。何といひ寄^{ハル}ルこと^{ハル}のばも。いらへもや
らぬ涙の糸。調子生駒も氣の毒^{どく}の。塵^{ちり}をひねつていたりしが。

品照姫^{地色}は涙をとゞ（9才）め。思^ウひ思ふて皆の衆の。世話^ウに成たか^{ハル}いもなふ。叶^ウはぬ恋路^{まよ}に迷ふより。いつその事に身をな
げて。一念^{ハル}太子の御身^ウに報^{むく}ひ。仏法をさまたげんと。おどしの言葉^ウに是はと生駒^ウが取りすがれば。調子^ウも驚^ウき仏舍利^ウをか

たへに置間もあら一興。まづくお待イヤく放して殺してと。歎き沈めば生駒はぬからず。コレく申太子様。さりとはお心づよい。お姫様の命の際。其柄香炉下に置いておとめ遊す事は成ラぬか。衆生済度のお心に。眼前人を見殺しても大願がき、ますか。調子殿も俱々に。お勧め申さしやんせいこのふ。サアおれじやて、どうせふと。持ッて参つた恨口持余してぞ見へにける。

太子もにげなく思し召。女人は五障三従とて。(9ウ)深き罪有身にしなければ。迷ふ心も痛はしく。左程に思ひ詰られしを見捨るも殺生かい。是も和国の神の道。受継は王法隋喜。望みの通妹背の契約。エ、イ。ア、有がたひと姫生駒。奴婢諸共にそりやこそ明イたと悦へば。ホウ契約はする物の三年の春、秋過て我。大願満し後ならでは。妹背のかたらひなす事成らず。夫レとても一旦契約せし上は。三世の諸仏も照覧有。異妻は重ねぬぞと。聞て品照又悲しく。傍から調子がコレ申。随分つないで置がよいぞ。ア、是迄にせふと思ふてよつ程骨をノフ生駒。イヤもふお前のきつい働き。きつすいの男めく。コリヤくく余りそゝるな。面々の主人の前。鼻と云ハぬはいふにまさるじや。エ爰な命取(10オ)めと綻び口。もつれ逢たるとれ合女夫。姫はじろく浦山敷せつかく世話してたもつたれど。どふやら底意が打とけいであぢな物じやとやるせなさ。女夫は引取そゝり立。それは氣遣遊ばすな。けふの工面もあの生駒と。こんたんの仮枕。ぬからぬ拙者として、くり合た其かたまりの小駱レ迄。里には置ど女夫合。離れにくいはこのつちにも覚へが有ばそこらは合点。幸のアノ乗物。一河入る野中から風呂。もちやらくしやらでナア女房共。こちの人。女夫が寄て浮びやうし。乗物の戸を押開く。

内よりくはらりと人見の平馬。やねの仏舍利ばい取ッてすつくと立ば。皆々はいもふ恐れて逃ちる奴婢。調子丸身構へし。

守屋が郎等人見ノ平馬何故あれに忍び居て。(10ウ) 其仏舍利を何とする。ヤイうつそりめ。太子が所業窺ふ為の我俳徊。
古瀬の局としめし合せ。乗物に忍び居て。最前シからの様子は見付た。主従共に縄かけて館へ引。かくごひろげと呼ばれ
ば。

太子驩ぬ御気色にて。丸は直ク様向原へ。汝は仏敵切しづめ。仏舍利を守り奉り。跡より参れ。ハツア畏奉る。仏舍利か
へし馳付ん。併君一人は恐れ有。コレく生駒。姫君諸共我君を。お供して早ふく。アイくそんなら御供にと。二人
は太子に引添て。御寺をさして急キ行。

ヤア太子をやつてよい物かと。相図のに小笛に古瀬の局。あまたの侍かけ付く。遁さぬやらぬと取巻たり。
中にも古瀬がはくきをむき。様子はあれで皆聞た。太子を追懸(11オ)討て取。御褒美をせしめると。かけ出るを引戻し取
ては投返踏飛し。平馬を初め数多の家来。太子を追ん追せじやらじ。仏舍利やらじとまつしから爰をせんど、三重へ切まく
る。調子にはしなく切立られ。仏舍利大事と人見の平馬。家来もしどろに逃帰る。

調子もほつと一息つぎ。そこ爰尋る鼻の先。ヤアよい所へ古瀬ば、うぬをとらへて守屋が工み一々回状。サアくぬかせ
と腰骨ほんく。踏付られア、申々。申ますく守屋様の云付で。人見ノ平馬といひ合せ。太子様を討取工み。元トのおこ
りは玉世の君に。守屋が惚ていらる、故。邪魔な太子を殺して仕廻。自身天下の政を取おこなひ。(11ウ) 后を手に入レ
んとの工み。もふく外に何にも申事はござりませぬ。お助ヶなされて下されと。ば、が涙は井戸がへに。溝をさらへるご
とく也。

調子は守屋が工みをば。聞捨られぬと欠出せば。古瀬が下から逃じた。エ、死急ぎのば、めんどいと。首筋引立か、へ帯ぐるく松の小枝に片はし。いはへて古瀬が首にひん巻。ぐつとしむればめを白黒。手足をはつてくたばりしは。心地よかりし死さま也。

死骸を蹴飛し主君の身の上。イヤく大事のく仏舍利をと。行つ戻りつもりやうのて。心定て剛金寺へ。欠行跡に古瀬が死骸。むつくとおきて執念の。調子が髻引ッ掴み跡へたぢく引戻す。ア、しやらくさい幽霊め。（12オ）うぬにかまふてゐる間がない。どつこ迄なと付てうせい。是からは淀堤。船引かくじやエイさつさ。扱もしつこい幽霊と。髻に引ずり三重へ行空の。

日域に仏法最初の剛金寺。聖徳太子の御建立豊国聖の説法とて。都鄙遠境の老若男女。あゆみを運ぶ其中に。在所親仁と連立は品照姫の姫生駒。御門の前に立休らひ。マア、遠々の道をよふお参なさんした。幸私も姫君のお供に参りおめに懸てお嬉しや。か、様も六松も定てまめでござんしよの。ヲ、か、が持病もおこらず。孫も達者でわるさしをる案じない。アイもふ夫は大ていや大方のお世話で有ルまい。守屋様へ御奉公に上つ（12ウ）て。太子様の舍人調子丸殿と馴染。六松産てお二人へ預しも。きのふけふの様成どもふ七年。孝行は扱置御苦勞計懸ケまする赦してたべと、様と。涙ぐみたる云訳に。ハテイヤイ親じや物孫じや物世話にせいじや。孫めが事案じず共。煩はぬ様に奉公大事に勤よ。アレ鉦がなるお談義が初るそうな。下向にはもふ逢まい随分とまめで居よ。ハテ扱いふても遠どの道。今夜はお館へつれ立てとめませふ。イ、ヤテヤそふでない。奉公人の宿小屋馴々しう泊のはうるさい物と。泊らぬ氣質のむくつけ親仁咄しはお堂でサアこいと。親子

打連詣ける。

牛馬は乗者(13才)に随ふ習ひ。守屋が悪に解あかぬ秦の川勝。横車おす主命に靡も時代の成行と。底には包む隠し目附。暫し佇折こそ有。

妹子ノ臣の秘蔵嫁名も宮仕も市の戸が。舅の使者の役がらも人目。まばゆき襦姿。供人数多かしこに残し門前。近く入来る。

跡から付いて人見ノ平馬。イヤ是市の戸様。余りそりやつれないといふ物。れつきとした侍が。一度ならず二度成す頼まれた此媒。色よい返事と向ふ見ず。云懸られて市ノ戸が。ヲ、お前もマア嗜しやんせ。でんどで人が聞時は夫亀井が身の上づく。ア、コレ夫レは余り堅過る。当世はこくめいなが捨りもの。(13ウ)名は此文に書いて有。草木もなびく守屋公の家臣。一家中にあたまの上ケてはないお人。マア取り上てと指出す文。取手も早く行過るを。猶袖ひかへサア迎もなら今返事を。イヤ返事する迄もない。此文を夫トに見せ其上で思案が有と。気色かはれば云かゞり。平馬もりきんで羽根袴。よいくそんならもふ破れかぶれ。引かたげて連行と傍若無人に取付を。シヤ推参など腕車。はづみにぎやつと投付られアイタ、。テモ強ひめらうじやな。腰骨が宿がへしたと。起る向ふへヤア川勝。コリヤたまらぬと頼まつかいこそくくくとにげて行。

思ひ懸なく市ノ戸もナフ兄様かと立寄ば。ホ、妹最前より子細一々見届た。夫トに仕る(14才)身は大切。もし落散ては後の禍。其艶書こなたへと。懷中に納れば気もおち付。本ンにマアよい所へ川勝様。夫亀井ノ介殿とは竹馬からのお友達。

互こゝろに懇意こんいの余り。こちの妹をそちへやらふそちの妹はこつちへもらをと。わたしも妹もついで嫁入よめいれ。亀井殿かめいどのの妹御月めづき益ます様はお前の奥方おくかた。がんじがらみの一門中いちもんちゆう。ホ、ソリヤ今改かへていふに及およびず。舅おやぢ妹子殿めいぢどのを初はつ亀井赤井かめいしやくい兩人共ふたりどもにお替かへりなきや。今日は此寺こゝのてらへ参詣さんぎか。アイ舅君おやぢきみより御太子みことへ密ひそ々ひそのお使つかひ。御門みかど外ほかにてお逢遊あひあそそふとの御事ごことと。いふ内人うちひと音ね沓くつの音ね。川勝かわかつ目め早はやくアレレ々レ太子みことの御来臨みこらいりん。密事ひそごとと有あれば某たれはと別わかれてかたへに立た忍しのぶ。

山門さんもんの内うちよりも立出た給たまふ（14ウ）聖徳太子せいとくたいし。市いちの戸頓かどて用意よういの石台せきだい。御前みまへにすへさせ引下ひきくだり。御寺みでらの内うちは参詣さんぎの障さやもやと。民たみを憐あわれむ御心みこころより此所こゝでの御目見みまへへ。数かずならぬ私わがが大慶たいけい。夫つまト亀井かめいの介すけか赤井あかいノ介すけが参まゐります筈はずなれ共ども。大内御用おほうちのみように事こと繁しげ御機嫌ごきげんも伺うかはぬ。私わがに参まゐつてお断申上ことわりまへよ。是こゝは又また日ひノ本もとに仏法ぶつぽう神道しんどう両議りやうぎをなす。其瑞相ずいさうの二股竹ふたまたたけ。心こゝろを籠こめし舅おやぢの献けん上じやう。お受う下くだされませふなら此身こゝろの面目箱植はつせうへの詞涼敷しんりやうぢキいひ廻まわし。

太子みことつくく聞召きこほり。妹子めいぢノ臣おみの使つかひとは。兼かて見知みちりの亀井かめいが妻つま。遠路とんろの所太義ところたぎにこそ妹子めいぢノ臣おみは。花はなを愛あいし花美くはびを好このめる老臣らうしんの。草花くさなの類るいひは送おくらずして。物好ものこのしたる白しろラ（15オ）木きの石台せきだい。植うはしは連理れんりの二股竹ふたまたたけ。割わつて云いハれぬ義理ぎりとめて。竹たけの園生ゆゑんの竹たけの謎め。解とけて大臣おほおみの深切しんせつを祝いわせりと御感ごかんの御謎ごめ。ハツト計はかりに市いちの戸かどは此通こゝり舅御おやぢみへ申まさば嘸なや悦よろこびと。会あ積せきに余あまる其中そのちゆうへ。

品照しんしょう姫ひめは走はり出で。ナフお情なさけない太子みこと様さま。心こゝろのたけの数々かずかずは文ぶんで。いた其上そのうへに。お直ただに申上まへたのに今更いまさら添事そへごとならぬとは。そりやあんまりどうよくなと。恨うらみにつらみに市いちノ戸かどが様子ようすをしらぬ不審顔ふしんげん。姫ひめは人ひとめも恥はらはず是こゝ申太子まへ様さま。添そねはわたしや存命ぞんめいぬ覚悟かくご極たぎめておりますと絶たり歎なげば太子みこと君きみ。ヲ、先達さきだちでもいふ通御身とおのこゝろの心こゝろはせつなれ共ども。丸まるをこばむ（15ウ）父守屋ちやうしや底意そこい知しレ

ぬは仏法の妨。万一朝家へ敵をなす所存有は一大事。其娘との縁組は叶ぬ事ならぬ事。爰の道理を弁へて恨とはし思はれ
そと。つれなき仰に品照姫。いらへも暫し泣入しが。

思ひ極て懐剣を。拔持給ふに市の戸が。驚き頓て押とゞめ。コハ御短慮な姫君様。恋は木折りでいかぬ物。悲しひつらい
色々のしんぼうせねば叶ぬぞへ。マアとつくりとお心を。静給へとなだめても。イヤ／＼はなして殺してたべ。今のお詞
聞上に生きて思ひに焦ふより死る。く／＼と一筋に。とゞまる気色有ざれば。

ハテ一興と御太子。姫の懐剣もぎ取て件の竹の片枝ずつはり。是はと驚く市ノ(16オ)戸か様子。いかゞと守居る。

太子は切たる片枝を。御手に取上ヤア品照。此片枝の切竹は御身へ送る恋の謎。丸に添たふ思ひなままつ此ごとく切竹の。

底意を割てみせられよと。仰にさとき市ノ戸が。ム、聞へた。是姫君。わたしが指した事ながら。お前の御父守屋様。天子
を恐れず威を振ひ。太子様には仏法の仇する心の善悪を正した上で切竹の。親子一所でないといふ謎が解れば下紐もおのづ
ととくるががつてんか。コレとつくりと此謎をと。気を付られて品照姫。ア、そふじや。あなたに無理はない物を。お恨申
せし勿体なや。父の善悪糺した上。天子に弓引キ我君に。仇する悪(16ウ)事に極らば。譬親でも天下の為。只一思ひに
切竹のお返事急度見せませふ。ホ、適也とよ品照姫。其いさぎよい一言に親と一つでないといふ。誠の操頭れたり。守屋
が心は糺さず共。王位を望む謀反の根ざし。日を経ずして頭はさん。悪人なれ共親は親討ては孝の道立す。不孝の悪名請さ
せて丸が妻には俱せられず。誠の操見へたる上は今日より芦摘の后と呼。二世迄替らぬ妹背の結び。言号は其切竹。伽
藍の靈地に植置て。丸が大願ノ日の本に。枝葉榮へる時節をと。仰は今に有難き縁をむすぶの女夫竹。姫は嬉しさおもはゆ

さ君が情の賜を。押載て身に添る市ノ戸(17才)も感し入。お暇給はる敬ひに。供人引つれ芹摘の后なりふり品照姫。打つれへ勇ミ帰らるゝ。

時しも取次の青侍罷出。守屋公より御太子へ御尋ねの趣有とて。綾の彈正直駒只今是へと演る間も。いかつがましく入来るは。守屋が郎等意地わるの綾の彈正直駒。主の権威に肩肘はり。むき出す眼に石台を白眼。詰て立佇り。主君守屋ノ大臣勅詔蒙る三ヶ条の御疑。急度た、ぜの御内勅を蒙れ共。所労に依て某が名代。いはゞ勅使も同然と。さも押柄にのさばり声。太子は礼義を糺し給ひ。何にもせよ勅詔の趣き。一々返答申さんと。席を下りし敬ひの。頭に乗つて直駒。ホ、尋ねの趣余の義(17ウ)でない。今天子の摂政として十七ヶ条の憲法を立。非常を守る隙なき身で。異国の法に民をまどはし。国に費の寺院を営天照ル神より受継だる。正統の種を失ふ仏法執行。唐土一味の謀反の萌王法を蔑にするは叛逆なりとの御疑ひと。云イも切ぬに調子丸。まつしくらに欠来り。我君是にましますか。仏舍利奪ひ返さんと存る所。御大事を聞たる故我君にきよじ有ッては悔共甲斐有ラじと。仏舍利は捨置て。是迄馳付候と。大息ついで申スにぞ。太子御気色損じ給ひ。三国伝来の仏舍利を人手に渡し。其期を延し立帰る卑怯者。エ、腹立やと御手を上。扇に真向丁々と置かけて打すへく。(18才)丸が詞を背く曲者。主従の縁も是限り。未來迄の勘当ぞと。努の御目にはらく涙。調子丸はハアはつと。身の誤りに詞なく。恐れ入てぞ蹲踞。彈正眼に角を立。ヤア大事の詮義の腰折てでつちめが折檻。勅使へ対して無礼の振廻。則上を軽むる科の一つ。サア今尋ねた一ヶ条の。返答有レと詰かくれば打笑給ひ。事新しき御咎。丸が仏法弘るは。治国平天下の謀。叛逆杯とは筋なき疑ひ。ヤア筋なきとは云ハさぬく。先達て異国の使日本へ。

忍び渡りし雲玄清虎純が生捕拷問すれば。先年入唐せし馬子ノ大臣より太子への返翰。コレお見やれと懐中より。一通を差出せば。(18ウ) 取上て御覽有。ホ、馬子が手跡に似たれ共。筆の立どの拙さは紛もなき贗筆と。仰を打消イヤア其詞くらひく。馬子臣が帰朝せぬも異国より裏切させる云い合せで有ふがや。又三種の神器の紛失も。唐土へ渡さんとこなたの所為で有ふがの。イヤだまれ弾正。三種の宝盜しは丸が所為といふ証拠。有りや聞んとせき立給へば。ヲ、サく。証拠は其内通書た物が物をいふ。但し云開きがござるか。云ハせも果ず調子丸。ヤア弾正。君へ対して無礼の過言。詞余さは舌の根を切てく切さげんと。膝立直し詰寄ば。ハ、ハ、差別を知らぬ牛飼め。勅詔蒙る主人の名代。三ヶ条の尋(19オ)相済。勅答申上る迄は。大政大臣の仮官。勸当受た扶持離れ慮外成出しや張。すつ込でけつかれと。かさに押れて調子丸勅使といふに手向ひも拳をにぎりこたへゐる。サア内通の云開きは。サア夫レは贗筆。シテ贗筆には何が証拠。サア其証拠は。ホウ有ルまいく。三ヶ条の云開き潔白に立ねば叛逆。繩打て内裏へ引と立寄ば。ヤア我君に聊爾せばまつ二つに切刻まんと。鯉口くつろげ居合腰。ヤア手向ひひろぐと違勅の科。太子の罪を究るかと。勅詔ごかしのきめ横定早繩たぐつて詰寄を。後に窺ふ秦の川勝襟首挿んで引戻し。どうどのめらせ真中にするつくと立。

地上つて(19ウ) コリヤどふじや。適切なる証義の場所へ出しやばつて勅使を投たは。太子がかたうと二タ心をさげるか。と。かさに懸れど動ぜぬ川勝。ホ、ウ天孫たる御太子へ聊爾に繩を懸奉り後日の咎。主人にかゝる笑止さにとめしが誤かな。ヤア謀反人に繩打に何の後難。ム、謀反といふには慥な証拠が。ヲ、有ル々。三種の神器を盗取り。唐へ渡す下工み是が証拠にイヤく成ルまい。三種の神器は日の本の王位の印。日本でこそ宝なれ唐へ取つて益なき道具。益なき物を唐土でほし

がらふ謂なし。ほしがらぬ物盗取渡されふ筈もなし。爰の道理も弁へず讒者の舌のこち付讒言。此川勝は呑込ぬと。云れてぎつちりサア夫レは。(20オ) サどふでござるといはれてぎつちりまだ有ル々。異国の仏法邪法を弘め民百姓を一チ味に付。徒党を結ぶ謀反人。ハ、ハ、ハ、民百姓を鎮るには或はおどし。或はたらし。人の心を直にさせおのづと悪事押へるが天下泰平の政。是でも謀反と疑ふのか。ヤどふでござるに又ぎつちり。繰出し理屈にまだある。仏法の掟は女犯潔斎と聞及ぶ。仏法を弘る身が其掟を破る不義の大罪。姫君呂照殿と密通の科人成敗せねば政道立ず。有無の詮義は禁裏の沙汰。人の役目にさはいばり。云ハれざる出しやばるなど。やり込られて実尤。外はとも有不義密通は科の第一。主人の姫へ懸れば逆用捨のならぬ天下の(20ウ) 大法。其ついでに今一人密通の科人有。きやつも一所に引出しては。ホ、夫レよからふ。不義密通をひろぐやつは。片端から縛首。其科人めは何やつぞ。ホ、姓名は此文に。ドレ上書をと差眼く。宛名は市ノ戸様まいる。綾の弾正儕レが文。ヤア、是はとはいもうけでんア、コレくく。もふ読にや及ばぬと。身に火の廻つたしかな顔。エ、過し籬の視私より余り思ひに絶兼参せ。ア、是々と両手に縋り。ア、去りとは情ない。色は思案の外だはいのく。いかに隠し目付じやとて。見た事。聞いた事。一つく言上せば人種はおりない。少々事は大目に見るが役人の情でござると。関に勝つたる(21オ) 飛入相撲。行司のもらふ心地也。

川勝はしたり顔。ハテ其元のお為を存じ同道で帰らふと存れ共。達つて太子の密通を糺すと有は政道の一つ。身も此文を御一所に。ア、是同道でいぬるはいのく。誰レぞ太子を引立ふといふかいの。ハテたつた今其元が。イ、ヤ口も腐申さぬく。然らば太子に云分なく某と同道で。ヲ、サ左様と是非なくも。不肖くに立上り。心は先へ目は跡に見帰りへ館

へ連帰る。

其間フシハルもあらず。秘生駒地色ハルこけつまろび転つ欠来り。コレ御勘当の様子を聞。有ルにもあられずきたはいのと。縋り付を取て突退。

諸はだ脱ぬいで切腹の。覚悟かくごに悲しく女房が。(21ウ)是まあ待てと押留る。ヤアとめるな女房。勘当受ては生がいなしサ

ア〜〜尤は尤なれど。腹切ず共御舍利を。命にかけて取かやさは。御勘当はゆりそな物。思案してたべ待てたべ。お前

に別れて六松や。私ウは何とせうぞいウのといさめつ泣つかき口説真実。真身の涙声。ホ、六松も可愛そちも不便なガ。大切成

仏舍利を。計略けいりやくに乗られ。敵に取れ我君の御勘気受。かゝる時節の御せんども。見届ずおめ〜と生なが存命。諸人に顔が

合されふか。生ウて居られぬ調子丸ハル粉が事はそなたを頼む。さらばと刀拔放すを。やれ待調子早まるなど。御声ハル(22オ)高く

聖徳太子。いたく歎も不便なれば。誠を明さん夫婦の者。太切成仏舍利。もしや仏敵ぶつてきは徘徊し。窺ふ者もあらんかと。調子

丸に預けしはあらぬ写し津つ軽石。正真地中の仏舍利は丸が肌身はだみも放さずと。取出し給ふ錦ハルの袋。今に初めぬごんじや権者の明察。夫婦も

あつと感かんぜしが。

調子丸地色ウ顏色直し。誠の仏舍利有上は。御勘当も偽りかな。イヤ切腹はとゞめしが勘当は赦ゆるされず。主従の縁を切しるしに与

ふる此石せきだて台竹そのうの園生の連理の枝持て目通り早立と。仰ウに調子不審顔。ムウ竹の園生の連理の枝持なぞつて立との竹の謎。中あら

ためんと引放せば。内には輝かく豊日ハルの宮。(22ウ)ヤア是は宮様シイ。高ひく。此内を見て勘当の謎なぞは心に解とつらん。丸

が連理の其片枝。妹子ノ臣より送りしが。仏法執行の我身には。守屋が外道の障有。勘当受し汝こそ敵へ聞ゆる恐れなし。

夫婦伴ひ願隠し丸が筐かたみと守立よ。弓でもめても鷲熊鷹。小鳥取れて悲しむな。早とく行と御声も御落涙にかき曇。ハ、ア

畏ては候へ共。守屋が工ミに御命。危ふかるべき此時節。御勸氣受て立去ば。まさかの時の御先途を。何れの人か見届ん。
若宮の御事は女房生駒御供せよ。某は踏留り君の御せんど見届ける。ヲ、氣遣さしやんすな。私が親元河内の国洪川村のと
つ様は。久間平辻道々（23才）から頼むに引ぬ侍気。幸いお寺に参つてなれば、親を力に若宮様。私が預り奉ると口も心も
かいぐ敷。イ、ヤとよ左にあらず。丸が命を助ん辻豊日の宮を失はゞ。妹子が心も無下に成。天照神の神孫は絶果ん。
太子は釈氏を請継で下方民の二世安楽。すくひ得させん願有ば。法難に苦むを必いたう事なかれ。とはいふ物の。ふびん
やな。汝は丸を力にし。丸は汝を杖程。せつなも離れし事なきに。今別れては逢事もいつを頼みに待べきぞ。あぢきなき世
と計にて。名残惜みの御涙。調子は冥加恐ろしの御仰やと声を上。五体も碎くる有難涙。女房生（23ウ）駒諸共に尽ぬ。名
残を泣叫ぶ。

時刻移りてあしかりなん早々落よ急げよと。いらち給へば調子丸。若宮抱立上るを。さらばとだにも言の葉の云ハぬはいふ
にます鏡曇る夫婦が目を払ひ。御後影。見送れば君も見かへる御別れ。壇特山の其昔。しやのく。童子が悲しみも。今身の
上に主従連枝泣々。別れ立かへる。

漸時移り八方に。物音人音騒敷。守屋が甥の鳥取熊人。縣ノ虎純人間ノ平馬。左右に隨身寄来り。ヤア謀反人の聖徳太子
は何国におる。守屋公の誼意を受召捕に向ふたり。逃すな洩すな搦捕。仏も経も一とくるめ。寺（24才）に火をかけ焼は
らへと。傍若無人の仏敵声。本堂さして込入ば。

参詣郡集うろたへ叫び。寺内の騒動大方ならず。虎純平馬は太子を引立。熊人は豊国聖の首引提門外へ踊出。ヤア太子三種

の神器は何国へ隠した。サア有様に白状せよと。孤悪の目玉むき出せば。太子無念の御顔ばせ。無上仏の遺徳を。滅せんと工ム。守屋ノ大臣。豊国聖の御最期も。前世の宿執丸が不幸。詞かはすも無益なれ共。御寺を一時のくはいちんと。焼失せんは勿体なし。其儘置て仏の機縁。結べよやいと宣へ共。ヤアあご叩かすな夫れ者共。寺へ火を懸焼払へ。ハツト手々に薬木の葉。集めあつむる傍逸無暫。(24ウ) 太子は御身をあせり給ひ。エ、是非に及ぬな。此山門には四天王を安持せり。仏法守護の威力にも。此難は救はれぬか。見捨給ふか浅ましやと。努の涙はらくらく。手々に松明振立く。太子め共に焼捨よと用意とくく。仏敵共。既にかうよと見へし所に。大門さつと押開き。頭はれ出たる毘沙門広目。二天に四天の仏力加はり。虎純平馬を取つて投。太子をかこひ銚ふり廻し。投打松明切払ひ。郡集やつ原掴み投。傍りも輝き立給ふは。すさまじかりける勢ひ也。

そつとしながら鳥取り熊人。ヤア太子が尻持仏の加勢。ほでもぎ折つて薪にせよ。虎純平馬やれか、れと。こはく下知する逃ほへに。虎純平馬を初とし。数多の軍兵勿体なや。赦させ給へとほへづらの。(25才) 命からく逃帰るを。遁すなやるなど三重へ追て行。太子も奇異の思ひにて。今の急難すくはれしは。則四天の御加護と。四方を拝礼し給ふ所へ敵追ちらし立帰り。ヤレくく久間平殿。ヲ、年寄に似合ぬ働き。ホ、太子殿。若イ程有て敵しい働。鎧甲といふ物。初メて着たが。見かけよりおもたい物。のふ肩痛やと脱捨る。布子ごしに汗ひつたり。ハイ私は調子丸が女房生駒が父親。久間平と申桶屋。私は此お寺を建た大工の棟梁甚五郎と申者。アノ桶屋殿と云合せ。何が御家来衆は皆逃る。敵をおどして帰さん為。奉納に上つ

た早や此鏡。銚長刀で四天王の片半分。アノ桶屋殿は毘沙門天。ヲ、大工殿は広目(25ウ)天。二天王不足でも。四天天二天の働きに。おぢ恐れたるうんつく共。あほう千里へ逃散て。あたりに近付悪人なし。とは云ながら草も木も。守屋になびき随へば。御命も氣遣ひ也。一ト先祖父が栖へ御供し。忍びくくに味方を集め。守屋退治の謀。ヲ、く此大工も御一所に。道の御供仕らん。いざ、せ給へとす、むれば。

太子御喜悅浅からず。おこころは神代なる。多負彦作の流れをくむ。職のみさほの正敷も。力を添る神妙さよ。兎にも角にも諫に任せ。忍びて時節を相待ん。ハ、御聞入有難し。御身を全ふ遊すが。天下の為民のため。渡世(26オ)はまづ敷職人でも。魂は侍に。おとらぬ家職のやり。たとへ。守屋が人樽の軍兵山をつく迎も。味方のどおけをしつかとすへ。手桶尽して切たいらげ。守屋が首桶はねつるべ。生ケたごをあらはせん。ヲ、くく心地よし桶屋殿。敵は悪人まがりかね。味方は正直墨かねに。神や仏の御加勢有。何百万騎有迎も。鋸だいい切。みな殺し。和国に法りの土台をすへ。悪魔柱を桁梁。追付御法の棟上は此。棟梁が請合ふしん。ホ、くく頼み有勇有。仏力有ける太子の御運。我日の本に仏道の弘るおしへは後々末法。朽ぬは君が代々に引さされ殿の千代八千代うごかぬ。道のかなめなり(26ウ)

第二 道行歩行路の五天竺

もろくの。花の外なる。法の花。皆あめつちの根にかへる二世を。おしへの道しるべ。なれし。雲井はへだ、りて。落付あての土も木も。皆我父の国なれど忍べば。こ、ろ置しもを踏もならわぬ御歩行路。もつたいなくも御太子大工桶屋が御供にて。河内路へさして落給ふ。御有様ぞいたはしき。遙に三笠のかげ高く。三輪のしるしもすぎがてに。手向の山の村紅

葉。草葉染なす。(27才) 野のにしき。其古郷へ。かへす成。袖ふる山の。うら山しゆき、の岡の松なみて。人めもしげる。葉もしげる。笠かたむけて石上に。暫し休らふ御つかれ。そなたの方を御覽有。ヤヨ旁。あれに名高きひゑの山。我日の本の五天竺。四明の洞もほがらかに。造化成嶽の神所を拜せよや。あら有かたやと久間平。甚五郎も手を合せ。アレくく剣のごとくに高き峯。いか成仏の御座所。御教へ下さるべし。さればこそとよあの峯は。ほうまん菩薩のすみか也。(27ウ) 扱又左りにれい水流れ。龍の形の峯はいかに。ヲくあれこそみろくの霊地なれ。こなたに当てきけん城。たいしやく天の風情有。麓にみなぎる滝の糸。鳥のごとくの峯つきき靈鷲山と打見へて。心もすめる計也。扱其外の山々。峯々。霊場れいたつ金武山きり立そわや。五大山御法の声の絶やらぬ。谷も小深き壇特山しゆん山せつさんきろくせん鳩の。宮居に飛かふつばさ天にのぼり地に下。とんでや爰に鷲の山りうのさは成岩清水。流れは千代(28才)も尽せしな。春の日影の糸遊に。暮ては宵。更ては既に暁の明星天は。西へちろり。東へちろり。くく。薬王薬生わうまん薬力。観音誓至浮陀羅苦山。東方薬師白髭の。霊地靈山ことくく。教へ給へば兩人は肝にめいづる有難さ。労も忘れいざくと。行手の森も。横おれて雲の絶間の夕づく日。立留りては呼かはし声は。梢にこたまする。法りの称名正覚をとなへ初めて三がいの。衆生をたすけ導し。なんさのうさの救世の恩。あまき法味をつむなる渋川。ごほりに三重へつき給ふ(28ウ)

守屋大臣悪逆日夜に長過して。向原の大伽藍一時の煙と焼払。用明天皇を擒にし奉り。己が居城に引籠れど。

地色ウ 中臣の宿称勝海を初とし。葛城嶋主は官軍の武者大将。其外公卿殿上人日月の御旗家々の物印。軍兵風に櫛削大手間近く

陣を取り。天皇奪返んと。城に合する鯨波。矢叫の音トほらの音。百千の雷も爰に落くるごとく也。

城中には守屋を初寄手を直下に見くだして。欠散せ追散せと口々訕る声計。軍慮満たる川勝が下知として。門戸堅固にかたむれば。寄手の諸軍も責あぐみ。死を一戦にや定(29才)むべき。始終の勝をや計るべきと。評義まちく成所へ。

嶋主が二人の子政若。都賀若大汗に成つて欠来り。父が鎧の草摺を押ひかへ。申父上様。夜前守屋が軍兵共公卿の館へ乱入。勝海様神手様真人様の北ノ方を始。我々が母柏手御前をもちらめ取て参りしゆへ。兄弟も討死と存ぜしが。当手の安否父の御事氣遣はしく此事知せ申さん為。すくくと後を見せ。是迄参り候と。涙を。うかめ詫るにぞ。勝海を始め諸軍勢。是はくと氣を失ひ軋れ。果たる計也。

陣中俄にひそめき立。みな落支度に見へければ。嶋主ははがみをなし。エ、口おしや。守屋が弓矢何程の事が有。(29ウ)心にくきは川勝一人。然れ共きやつが敵に有内は。帝のお命別条有まじ。ヤイ駟レ共。儕等も父が子。若年成共鎧を着たは何の為。だてに着たか。寒さに着たか。兄弟枕をならべ討死せば。親は何ンぼう満足せふ。母をおめく敵に奪れ。父が身の上氣遣ひ連。ほうくくのさまでうせたるを。ヲ、寄得によふ来たと悦ぶ親と思ふか。大腰抜のうろたへ者。ごくにも立ぬ注進し。妻を奪れし人々に氣を落させ。守屋方へ降参させ笑はん為か。アレあれ見よいづれも色も替らず結句心に励み付キ。うぬらが母を奪れし此嶋主も人々への申訳。朝恩を報ずる為討死といふ物をして見せふ。勘(30才)当じや立つてうせふ。妻子なければ世の中に。思ひ置事少しもなし。まだうせぬかほへおるか。柄に手をかけ立上れば。人々驚き分ヶ隔。軍の評定延引せり。いざ御出と無理やりに諸軍のへ内へと引分る。

地中 日はさやかにてかき曇。めは泣はらせと骨々に。染付親の諫言を。最期の勤と兄弟が。点き合て立あがり。守屋が大手に走付。葛城嶋主が二人の子兄政若弟都賀若。母は奪れ父には不興。生キがいもなき此命。城を枕に討死する。不便と思ふ者有らば。おり合やつとぞ呼はれば。

地色 子共め当に我一と高名諍ふ守屋勢。中にも役の荒熊王。(30ウ)陸田の岩切なんど、名乗。まつしくらに討てかゝる。兄弟につこと打笑ひ。ヲ、聞わけ有つて忝い。参りそふと渡り合秘術をつくし戦へば。荒熊岩切車切り切立られて兩人は。即座に打れ死てげり。

地色 政若都賀若大音上。弱武者は相手にたらぬ。秦ノ川勝有らざるや。出合やつと呼かくる。軍兵共腹を立鱈にた、けと声々に。おめいてか、れば死物狂ひ。嶋主は子に引れ取つてかへし名乗かけ。面テもふらず切込。親は討せし子は死んと。忠孝慈愍の切ツ先に。切立られて軍兵共。城中へさつと引。門の戸はたと押立る。

地色 猶切入らんず勢ひに。ヤレ待子供等でかしたと引とめ。ヲ、夫しでこそ父が(31オ)子よ。大将を初め諸軍勢。氣を落せし武者ぶりを。引立ん為呵りしは謀。かゝるけなげの子供らを何しに勘当する物ぞと。いへば兄弟絶り付。親のお慈悲と計にて。嬉し涙にむせびける。

地色 父も漸涙を押へ。コリヤ粉共承はれ。草木も靡守屋が大勢。小勢の味方せむる共。たやすくは落がたし。其上太子のお行衛知しず。妹子ノ臣も二上が嶽に引籠。後話にも来らず。諸臣の心まちくにて一ト先領地へ引籠ると。中臣の臣を初皆々陣所を払ふたり。此嶋主も爰ひかにいざく来れと立上る折こそあれ。

誰か射ル共白羽の矢嶋主が真向に。裏をか、せてはつしと立。急所の探手たまり（31ウ）得す。仏倒しにかつばと臥。兄弟あはて取付て。城を見てははがみをなし。顔を見てはしやくり上俱に消んとかこち泣。嶋主眼をくはつと見開き。エ、残念やぬしもしれぬ流レ矢に中むざく死るか口惜ひ。川勝を存生に味方へ付ず剩へ。互の詞も反古にして。此儘死る残念く。我死たり共コリヤ。是香花入ラぬ回向もすな。川勝が首取ッて我に手向よ。必々我なく共身を全ふして義を守れ。薄着するな毒くふなよ。達者で兄弟中よふせい。人の一心は頭にとまる。我首敵の手に渡すな。骸に構ふな首計。持チ帰つて能き葬れ。父母に離れても。泣ぬが侍。ほへおるな君の為には死お（32オ）れと。指ぞへ抜て我首へ。諸手をかけ声かき落し五十一期は尽果たり。

父がいさめに恥入て泣ぬ弟泣ぬ兄。泣よりも猶哀レにて。骸をか、へ兄弟が。煙となさんあだし野の野辺の送りの力なく打連。てこそ三重へはるかなれ。

若蘭が織し錦の歌百花散乱すといへ共。夫を思ふ心重き事山のごとし。此日ノ本の仮名づかい千言ン玉をつらぬるも。心を頭はす事読なす文字のてには有。守屋ノ大臣帝を擒にし奉り。公卿大臣の御台所宗徒の武士の北方。奪取ッて人質とし天地も赦さぬ天子の粧ひ召捕来る上臆達に對面せんと。弓削ノ広鷲秦ノ川勝召供して。何れも上下高（32ウ）股立尋常に出立しは女中の心を謀事守屋が差図としられたり。捕へ置たる人質女。夫レこなたへとの下知の中。引れて出る。花の顔。先は中臣勝海の御台桜戸御前。次は大伴神手の妻。千歳の前。葛城ノ嶋主が妻柏手御前。小手をゆるめし羽がいじめ。上は襠一様に。おくれを見せぬ敵の前。おめず臆せず座し給ふ。

守屋大臣地色を懸懸。ヤア〜女原。皆々情じやうのこはひ男を持恥くつをかき。苦痛くつうをする人質にんしつの身の上を。銘々夫の方へ打歎うちなげき言送り。味方に降参こうさんさせれば。官録くわんろく共に相違さういなし。サア面々夫を此守屋が味方に付。夫婦めでたふ。暮したふは思さぬかと。詞ことばに和なラを入いれたらしける。

桜地色（33才）戸千歳せ詞ことばを揃そろへ。守屋守は兼かて玉世后たまご様に恋慕れんぼより太子様の仏法ぶつぽうを妨さまたげ。王位おういを傾かたむける程の色好み。定さだて氣に入いらなおてかけ妾めかけ お局おも有あ筈はず。女の心は馴なでも御存ごぞんないかいの。命いのちにかへ身にかへても。夫おとこの威勢いせいをましましたいと。ねがふは天性てんせい女の情なさけ。いかに人質にんしつがつらい迎朝敵むかえあそびに降参こうさんさせ。人非ひとび人畜ちくじやう生うまといはせそふな女おんなと見みへるかどつくりと目利めりしや。サア何なにもめき、させまいか。ヲ、目利頼めりたのまんと。一度いちどにきつと振つ上ある。顔白妙うしろたへに無念むねんの涙雪なみゆきに。霰あられぞ乱みだれける。

弓削ゆきぞりノ広鷲ひろじゆぞせ笑わらひ。扱あは面々おももが夫守屋公おとこの味方に。懇望こんぼうすると氣きを廻まわしての力身りきみよな。彼等かれらごとき何万騎敵なんばんきに成なるとも。不殺ふころの軍法ぐんぽう。夫婦ふうふ一所い所に有度いうどは今いまでも味方に付つさへすりや。所領しよりやうをあたへ安楽あんらくに添そせんと。守屋守が情なさけ。悪あふ聞きれな女房達にようたつとつろりとたまたます油口あぶらぐち。

女房達にようたつ顔見合胸迄かみせきくる涙なみをおさへ。エ、千万無量せんまんむりやうも耳みみ穢けがし。敵てきの擽とりこと成なル上うへは。夫おとこにあはぬ。生なきては帰かへらぬ。二つの覚悟かくごすへた女おんな。聞事きんじない。云いフ事ことない早首討はやくづとの給たまへば。さしもの守屋守いひじらけ。持余もちあしてぞ見みへにける。

情なさけをふくむ秦はだの川勝進かわかつしんみ出で。それ〜に夫おとこ有女中あんなは。男おとこの（34才）心こころ泣ならす為ための人質にんしつ。あれ成な柏手かしやうの夫おとこ嶋主じまぬしは、今朝討けさくづ死しやもめの一人ひとりり身み。とらへ置おて益えきもなしナウ柏手御前かしやうごぜん。幼少せうせうの子こも有あると聞き。歎なげきを申まをす。帰かへりたふは思おもさずか。御前ごぜんの取成とりな

誰有ッて悪かれとは申まじ。爰は願ひの有そふな義と。おしゆとなしに教れば。

柏手^{地色ウ}顔を振上て川勝をつくぐ見て。暫し^{スエテ}涙にくれけるが。夫嶋主^詞討死とはたつた今承はり。悲しひとはいふ物の。武士の

うへには。兼ての覚悟今更歎事ならず。常々夫の申されしは。敵陣に人多けれ共。心にくき弓取は川勝一人。命の内に生て

成共首成共。聖徳太子^{地中ウ}（34ウ）の御旗^{はた}下に一度は附て見せんと。詞もあだに軍場の^ウ若の下成^{こほ}魂魄もさこそ無念に有らめと。

顔ばせを見るに付。情の詞聞に付いとしいは我夫と覚へずどうど伏まるひ消入^ウ計歎しが。

各一^{地色ウ}所の人質我一人^ウ助り此命何にせふ忘れ筐の二人の子共母が浮身を悲しみ。おめくと降参し二心よ。卑怯者^ウとゆび

さ、れ。父の名迄下さんかと。案ずるは是一つ。

お情^{地色ウ}には一番に此柏手が首切ッて。獄門^{ゴクモン}にかけ。子共に見せ。母が恨父の仇。君の敵と一心に。無念^ウに無念の義をはげまし。

鬼神も欺く守屋。小腕^ウの小太刀も切かけさせ。親も親也子も（35オ）子也と。世上のほめ者^ウ武士の手本と成体を。獄門の木

の上より見る嬉しさは此命。百千万にかへられよか。早々命を召^ウ様に。お頼申て下^ウさるが。御情ぞやとかき。涙に。むせ

ふ哀さに。かけかまひなき下部迄^ウ感涙催す計也。

守屋^{地色ウ}ほつとあ、み果。是非^詞は重て沙汰すべし。山館に移しこめ川勝広鷲。兩人に預くるぞ去なから。名有^ウ高家の妻なれば。

礼儀正しく敬ひ琴琵琶^ウは慰^ウ次第。夜廻り^ウ厭敷^ウ昼夜用心おこたるな。若奪返^ウされては味方の恥辱。兩人が越度^ウ。急度申渡

たぞいそふれやつといひ捨て^ウ帷幕^ウの。内に入給ふ。

弓削^{地色ウ}の広鷲したり顔。山館^詞迄も二里余り。（35ウ）大事の科人道の用心。牢輿^ウ繩網かけん。イサクと云^ウぜもあへず柏手く

はつと色をかへ。人質の我々何咎有つて科人とは。其科の品聞ふ。コレ何も公卿殿上人の御台所。此柏手も武者大将葛城の嶋主が妻。鳥獸のごとく。縄網とやらは懸た乗物乗り様しらぬ。道の用心ならば杵械。楛でもさ、ばさせ。其分では此身が金輪際迄にへ込共。いかな爰は動ぬと。はら／＼涙の目を見合せ。上臈達チ一様に。膝を堅めし張肘はにが／＼敷ぞ。見へにける。ハ、ア是は／＼御尤。広鷲が詞の誤り。科人などのごとく牢輿にはと申事を鹿相千万。それお託言／＼。イヤモ（36才）川勝に御免下さるべし折しも陣中御車は出し絹の用意なし。見苦しなから少の道張輿に召れ下されかし。お輿添は我々御供仕らんと。式台すれば是は／＼。かふ申も夫トの名を惜むゆへ。お歴々を輿副とは憚り。お役めの警固ならばともかくも。鉄の鎖はのがる、共川勝殿の心有。情の繩にからめられ逃走道もなし。何に成共乗られて。只御苦勞のない様に。皆様お立と会釈して。一度にはらりとたつか弓。男も女も意路一つ。たとへ綱代の車より。武士の詞ぞ。玉の輿心を。乗て三重

余所には。しらぬ飛鳥川淵は瀬と成人心。雪折竹の。一ふしうたふ声のあや。しらべ合せし。三つ（36ウ）のをの。何に譬ん軒の村雨さ、めぐと。かの白居易になかせたき浮世の外の山館。秦の川勝弓削の広鷲あづかりて。女中の心いためじと。声よきござ琵琶法師など召入て。氣をくぼり痛はれ共塀の外もは乱杭や。なれし都は。近けれど。千里を隔る二重垣。けふはかんきうの人にして明朝故地の妾と成。思ひを爰に籠鳥のしたふ雲るははるかにて。近付物は最期日の。かげも短くくれか、り。番所の火鉢吹おこす。風より外カに出入の。人をきびしく咎けり。

表門より時の拍子木丁々と打たつれば。中門の太鼓数にこたへて打合せ。七つの切りの札改め。外より（37才）入来の人々

早出られよと呼ばれば。めくらほうしの辰の都歩む量に目はあれと。けつま月夜も。やみの夜も昼共なしにさぐり足。はたかる足の又明日と出る所を。武士共両の手をむざと取。懷中改め御せい法。ソレぬつと手を入さがせとく。懷さむくはながみうすきこほりさとう寒晒の。たん切生姜声の葉は身に相応。かいた物はもたぬかかいた物が有らば是へ出せ。夫はめいわくかいた物はござれ共。ずんどふるひもめんく。ごめんくと云捨てとほくとほくと帰る跡から又とぼくと。川舟といふござが手引くと呼こがれ。出る所をひとつらへ。いつものとをり(37ウ)吟味すると手を押入れる懷も。匂ひ袋はな紙袋中カにはちこま琴の爪。かやうの物は構ひなし此ふくさに包しは。かいた物で有そうな。ア、姫ござにざんない事。そりやかいた物じやないと。我でにさぐつてコリヤぬいた物。眉をぬいた眉げぬきと。口がしこくも云すべらして立帰る。

きんか天窓の典葉さいきの玄考斎。ヤ川勝殿広鷲殿。桜戸御前の血の道かるひ事く。薬一ツ服調合せず暫座当に一曲ひかせ。忽本復致させし是が老医の機転の療治。右の手の三みやくか三さがり二あがりに。びんくしたる見立也と笑ふて通るを。両の袖口しかと取。誰しに(38オ)寄す懷中改の上意也。懷さがしてこれく此封じ文誰しに頼まれ誰への文ぞと咎ける。イヤ文でないがいきの療治の葉代。ひねつてみても知れた事上ハ書にかいきの証拠。銀子三両拾二匁九。申くとせきを遁る、心地して。めんくに札合せ残らず。帰れば門々しめ。奥に女中の。看経の声々ほそきともし火の。かげに二人の預りも。心休まぬ昼夜の勤。ねふり催す計也。ナント広鷲殿。弓矢にたづさはる者の死後に。名を上るも一つは女房の心に有ル。人質の女中達打揃ふたるけなげさ。訳て柏手御前のみさほといひ利発さ。あれに(38ウ)添し嶋主ならばと奥

ゆかしうは思さぬか。夫トにつき柏手ト一人小歌も聞ず引籠ルり。心持もすぐれぬ面体ト。おもらせては貴殿我等の不調法ト。すこし様体トお尋ナあれ。ナウいや、拙者はせんど。籠輿トに繩網トかけふといふてやり込メられ。イヤモ気の取にくひ女。又詞とかめにあへばこは物。川勝殿お出ダあれホ、然らば我等と踏ムしだく。袴トのすその長縁トつたひ障子トのまへにこは作り。何れもお氣うつなき様にと。主君より念入ルるる御心トばらしにと。あくる障子トに。かげはさゝねどかきうつす御経トに心すむ。柏手御せん筆トをとめ。扱ツ々何かのお心遣い。氣の(39才)つまる事もなし。是は爰元では御はつと法花経トと申てしよきやうの王。夫ト嶋主ほだいの為百ヶ日迄にかき立んと。急ぐ程猶筆廻ラらず。火燧トはなし。手は冷る。何と申それへ出て。火にあたる事は成マまいかな。お道理トく式法トなれば御近所トに炬トは切ラれず。いざく是へと伴ヒひて。炭トつぎなをす埋火トのあたりは春を知り顔トに。涙トの氷トとけぬべし。ハアお二人り左様に飛ヒいて。自ミ独リあたるも迷惑ト。女の傍トがおきらひなら此方トこそと立婦トる。ア、夫トはけつく迷惑ト。少しもおかまひなさるゝなと袖トに取付川勝が。手を袖共にじつと取ツ。申コウ袖を取かハ(39ウ)せば昔が思ひ出さるゝ。嶋主殿と我中トは常体トの夫婦トでなく。互ニに恋合思ヒ合其惚ト初めは自ミが。心トいつはい筆トに染メまつ此様に袖を取ツられたおりに幸ヒひ。あつちの袖へ彼文トをまつかう入レたと川勝が。袂トへ誠の文一通。入レればはつとつき戻ス。又おし入レるをつき戻スし。ナフく寒サむ時分に濡咄トしはうつらぬ物。冷ハあがつた火鉢トに致シそと寄イたり。いかにもく恋も無常トもおもしろからぬは人の身トの上ト去ナながら。聞クも記念語トも筐ト。耳トの役に聞ケて下さンせと。言葉遣ヒも和ラげは。広ウ驚何の氣トもつかず。イヤ申柏手御前。見かけと違イ(40才)川勝は色事ト嫌ハひ。子ト曰ク火打石トの吸物トア、かたいやつく。耳トの役トなら此トはなへお咄トしなされと寄シ添ハは。

地色中
火箸ばし手ぐさの火ウぜ、りに川勝ハルを尻目しりめにかけ。ほんに此火ウに焼やれふ浮気うはきでないうそでない。わたしは始め禁中きんちゆうに宮仕。嶋主殿
は侍所。二十一の元服男げんぶく傍輩ほうばいの上臈中臈おかうしすぎて毎夜毎の男おせんさく。ア、浦山うらやましい事かな。あの男おに文ぶんが一つ付
たいなど。思おもひの数々いくとく言。折をを見合サア爰こゝじやと。思おもへば傍そばにあまのしやこ。エ、めんどうなあまの邪魔じやこのない時節
を。く。と。ム、待まちッて居たか。アイ。シテくどぶじや。サア天あまからふる時節ときふしを待まちは雪ゆきもふる。(40ウ) 師走しわすは内裏うちもか
ちんつき千石せんごく万石まんごくソリヤ上臈うらやま達。うすへ入いれふと仕丁しぢやう共どもが料きねもつて追おまはる。まだ十六じゅうろくのめからは大おほきな料きねがこはふて御殿ごてんッ
ぢうを逃にまはり。御番所ごばんどころに彼人かのひとがきつとそこにもあまの邪魔じやこ。エ、しんきな此肌ここのはだに付た文ぶん。ぬれぬ先まきに早はやふやりたい。
あまの邪魔じやこかあちらむくかと思おもへど爰こゝを大事だいじと見詰みづてゐる。アレくくあそこに餅花もちばな。ソレくくそこにも餅花もちばな。した
かく。しだり柳やなぎに桜花おうしやう。はなに驚手おどろぶりうぐひす声こゑに付。手に付つきよろくきよろ作はつ広ひろ鷲じゆが。遣わはる、間に文ぶんそつと。
やれば戻もすもどせばやる。ハテよんでいやなら引ひきいて捨すて(41オ) たがよい。拵うみますく。拵うんでもせがんでもふみかへ
すのは丸木橋まるきばし。いや共ともおふ共ともいははししつかりと文渡ぶんわして。ア、嬉うれしやと思おもふたか恋こゝろのこと始め。胸むねの思おもひの煤すすはき
は。昔むかし咄はなしかたる此身こゝろは炭すすよりさきに。こがれて灰はいに成なそふな。思おもひを推おして給たまはれと語かたるも。涙なみだのくもり声こゑ。川勝かわかたはすま
ぬ顔かほ。広ひろ鷲じゆはあまひ顔かほ。可愛かわいやそばにあまの邪魔じやこ。口くちへは入いらぬとなりの餅もちつき咽のどかならふと笑わらひける。
表門おもてかどより呼よつぎく。君きみよりの御上使ごじやうし有ありと呼よはる声こゑに拍手あしづは。驚おどき奥おくへ逃にて入いる。
程ほどなく出でくる使者しや男おとこ。しかつへらしく声こゑ作り。某たれはかうべの有熊うまと申新参者しんさんしや。使し(41ウ) 者ものぶり御覧ごらんなされん為ため。広ひろ鷲じゆ殿どのへ
俄たちの御用ごよう。仰付おほらる、むね有あれば夜中よなながら早はや々々出仕し有あべし。跡あとは川勝かわかた心こゝろを付用心おみよこ油断ゆだんなき様ようにと。御念ごねん入いたる誼意おんむきの趣おもむき。

御番所地ウしかとお請有。拙者ワはお暇仕ウるとにべなく使者フシは立帰る。コレ詞く川勝殿。夜中キウに急のお召は何事。片時ヘンシも猶予ウラヨなりがたし御番所を渡し申。ヤア広鶯が家来共。馬ウマに鞍置跡ウより追付。身ウは一寸も急がんと。はかまのもの、立取あへず。夜半シの鐘カネの声おくる風フウをへ追てぞ急ける。

川勝番所に只一人り。つくぐくと思案シし。今宵俄イマヤに柏手御前某(42才)へ恋慕レんぼのしかけ。子細や有んと此文は受取しが。あの女猥みだり成者ならず。どふでも子細有物と。上ウハ書みれば丸中がなに。かはかつさま。ム、上はわざと恋の文。内に大事を書たるかと。独ひとりうなつき開く文。其筆立筆立に。よとみたかかほくこひかはと書初地ウしよりおはり迄。やまと詞をまなまじり。見れば見る程某へのぬれ文。奥書ウに一首の歌。恥詞かしや。身ウは逆さか様の恋衣。うちかへしてはあはれ知レかし。エ、書地ウいたりく畜生ちくじやうめ。此川勝をなぶつてかあなどるのか。見るめも穢けがれ取手もいまはし。みさげ果ウたり。切キつても捨度ウ女めと一人り修羅しゆらをぞもやし(42ウ)ける。

庭庭色ウの高堀めつきくと破る音。シヤ盗賊か忍びかと。袴はかまの紐ひももときは何時夜中過。帯しめ付て高ウツからげ。心かけおく身の固かため。筒とうの火かい込ミ搦なをおる、も音せじと。庭ナラス地ウの木の間をさし足。ぬき足灯ともしひせむ。背せけ挑燈てうちん伏。まつ共白刃ウの山ウがたな。一ト間間なんなく切破り。くぐる形かたちは星ほしの影明あきらかならねど十四五計。十二三のでつち兄弟兄弟らしく。たゞ者ウならぬ身の取廻えんまし。掾えんま近まくよる所を。

くはつと上たる筒とうの火に。かくご極めし兄弟兄弟も。猶ウすさまじく胸どうぶるひ。おちけを見せじとふみしめてフシにらみ。合あて立たたりしが。エ、口惜詞ひ兄様。本望(43才)はとげられぬ。是非ぜひには及およばぬ何とせん。是迄これ忍び入たる思ひで。母様の顔一ト目見

ていさぎよふ打死せん。ヲ、尤と欠行を。侍テと一ト声南無三宝。すはしそんぜしと加勢の侍。跡より続て飛で入。二人の子供を後にかこひ。頬かぶりかなぐり捨。ヤア珍らしや川勝。子細云はずと子供が加勢。人質の上臈達。目をふさいで渡し召れ。いぎに及ば、えん者のよしみ。切ッて互の真劍勝負。ホ、妻絹が夫赤井ノ介。互に敵味方と別れて此かた。イヤ珍らしい対面。最前河辺の有熊とさまをかへ広鷲をおびき出せしより。斯あらんと悟りし川勝縁者は内証。人質預るは主(43ウ)命。ばい取ラれては武士立す。抛捕んと待チ伏に。思ひがけなき二人の子供。扱は葛城嶋主が兄弟の扮共よな。母をうばい助けんと孝心。砂子の中の金とはおこたらが事けなげさよ。某が腹切共。目をぬふつて本望をとげさせたい場なれ共。奪せぬが親子の為と。聞て赤井も兄弟も。とは又いかにと詰寄ば。ホ、此母ながらへては大悪事を仕出し。不義五貞の悪名を子供の身の上。なき父がかばねの上にとさらす女。其儘捨置キ刑罰させ。無道の母を思ひ切父が武勇の名を継こそ孝行なれ。相役の帰らぬ内早々戻れ。赤井ノ介もお帰りや(44オ)れといはせもあへずヤア卑怯也川勝。子供が母に悪名付。あらぬ工みの偽な。ヲ、そふしやくなせ母様に悪名付た。証扱あらばサア聞ふ。くくくと兄弟か。反打かけて詰かくる。

川勝涙をはらくと流し。其健き有様を見るに付てもナウ赤井の介。女は両夫にま見へぬ控。しかるに夫ト嶋主が。討死の忌中といひ。殊に人質囚はれの身。あづかりの某へ恋慕し。人前も憚からぬ見苦敷すへ膳。語るもいまはし是此文。母が手跡は見しり有ラんとなげやれば。ヲ、母の手知ラいでよい物か。ナニ上ハ書は川勝様。ナウ都賀若槌に是こそ(44ウ)母の筆。ほんにそふじやと兄弟が。戴かせ戴いてひらく心ぞ無暫なる。ホ、夫レこそ倭詞の恋の文。とつく読くと。云ハ

れて見返しくり返し読^ウて見ては巻返し。ナフ都賀若。悲しや母様は気が違ふた。天魔の見入か口惜^{おし}やと。兄弟孫にもたれ伏
あたりも。恥^{スエテ}ず泣^中ゐたり。ヲ、道理^詞く口惜ひ筈悲しひ筈。父嶋主がめいどより手をのべて。ずだくにもしたからふ。
斯^{地ハル}魂^{たま}の穢^{けが}れし女。母としたふは武名^{ふめい}の恥。捨置^ウかへれとせいすれば。イヤく一家一門の恥辱。嶋主が名代と名乗宗打し
て。冥途^{めいど}の父が努^{いかり}を休めん。そこ退給^{地ハル}へとかげ込を。ヤレそこつすなと(45オ)赤井ノ介。政若をとむるまに。都賀若
先^ウキへつとと抜^{ぬけ}。障子引明母を見るより刀引^ウぬぎ。人でなしのか、様。と、様の名代と。宗打^{おね}に四つ五つ小腕廻^{うで}つて肩^{かた}の
くち。三寸計切込れ。うんとおれば兄政若。走りか、つて弟が刀引^ウたくり。ヤア侍の子がむね打をしごこない。母様に手
を負^{おふ}せた。うろたへ者と宗打^ウに。りうくはつしと打刀。母は朱^{あけ}にそみながらわけ入刀もぎ放し。ヤア兄弟か。此母を不義
者と。聞て無念さ身に余り。兄に替^{かは}つてむね打とはホヲ、でかしたく。道^{さす}は父の子なるぞや。全く母が不義でなし。其
いさぎよきおこたらに猶も^{はげ}励^むを(45ウ)付ん為。異見を書いて送る文。情有川勝殿に。届^{とど}けて貰^{もら}はん為なれど。恋の文に
よまれし故。母は不義の名を取しと。聞^{地ハル}より川勝声^{こゑ}あら、げ。ヤア口賢^{がし}ふいふたかく。まざくしい濡^{ぬれ}文を。子共へ異
見の文成^ルとは。人を盲^{めくら}のぬけ詞。サア違^ウふたか違はぬか。子供を証拠に赤井ノ介。高々と読^よれよと。投^なやれば押開き。
何^詞々。よとみたかかは、こひわがこひしとい。のりなしふねはいと、おもふ。ソレきいたか子どもら^のりなしふねとは後家
の事シテ其次は。なれまとうにこひなびけ。見ぬたもとにたき。なさけとおのくこひやみが。とれなひびむなせついはこ
やおとこかり(46オ)とふつたへもつたへ。エ、した、るい。シテ其跡はなんとく。ぬしはうとむか。われらしんぞおき
ふし。ひこそおなこのちのよろこび。たゞしたひもとくく、かしく。返すく一首の歌。恥かしや。身は逆^{さか}様の恋衣。

打かへしては哀れしれかし。かはかつさま参る。サアあの文章はぬれ文ならで。又別の読かた有や。子供をせいする異見の文か。一字一点違ひなく。サア聞んとぞ詰かくる。ホヲ、お尋ねなく共其文章。よみ開かねば自が。末世に残る不義者の。悪名は雪がれず。子供へ異見の証拠はこれと。もぎ取刀我と我。肝先ぐつと突立る。兄弟わつと取絶ればア、寄ル（46ウ）まいくと押退て。ナフ川勝殿。奥に書いたる一首の歌。身は逆様といふ所へ心付ねば是非もなし。恋の文に書たるは。若シや落ちる人めのふせぎ。直に読ば恋の文逆様によむ時は。筆の初メがとめと成とまりは筆の中と成。大和詞に含ませし親の心のせつなさを。聞訳て給はれと息切々の涙声。コレ下紐をとくくと書キしを。下から読なせば。ぐどくおもひだし。たゞひごろよの。ちゝのこなをぞこひし。ふぎをぞむじらればかんどうはしぬ。へだつもへだつふたりがこと。おやこはいつせなむすびなれど。かみやひこくのほとけ。さなきだにしともたぬみ。げびなひとにうと（47オ）まれな。父母おとゝいはねふしなりのいとしひこ。かはひこ。はゝがかたみとよ。上の名あては政若都賀若。兄弟の名を一つにして。かほかつ殿を逆様に。下からよんで行時は。まさつがわかでは有ざるや。ナア人々。逆様文字も直様に。よめば直成親の慈悲。是でも母が徒かと。聞より川勝赤井ノ介。疑ひ晴て相手の。才智を感じる計也。

母は苦しき息をつぎ。ヤイ政若。都賀若守屋退治の御陣に加はり。鍵一本の御用にも立んと思ふ所存はなく。母おや一人助んとて。敵の館へ忍び入。もし捕へられ殺されたら。どの命で御用に立。（47ウ）兄弟が此母をいとし可愛と思ふより。父上がおことらを可愛ふ思し召れたは。百倍千倍増れ共。其いとし子をふり捨て。めざましい軍の討死は。武士の役めと知らざるか。有にかいない此母に心を引れ。兄弟爰でむだ死し。家の氏は誰が継。武士の役めは誰カ勤る。まつかふ有らふと

思ふた故。異見の為に残す文。母が此世にないならば忠義一途に励んど。敵の館で死るのは彼王陵か母親の。子をはげませし手本の自害コリヤ守屋は朝敵。父母の敵と思ひ。一陣に勧んで討取高名せよ。夫レこそめいどへ経陀羅尼。千部万部(48才)の手向ぞと。聞に兄弟すがり付。コレか、様。親の敵の守屋を討つてもと、様は死しやる。手柄をしても誰レに見せ。誰が誉て呉ませふ。死ではし下さるな。存命てたべコレか、様。鹿相でわしが切ました。こたへて下され赦してと。弟が歎けば政若も。親の御身に刃を当て二人に報ふ天罰は。いつの世にかは遁れませふ。お前の口からゆるすとお詞聞せて下されと。くどき歎ば母親も。ヲ、赦さいで何とせふ。切つたも孝の道じや物。二人が罰にはならぬぞやと。親子手に手を取かはし。涙争ふ袖袂血汐の。(48ウ) ふちをなしにける。

川勝は猶赤井ノ介。親子の心思ひやり初めのにくさ逆様の文詞こそ哀なれ。

川勝はつと飛しさり。ア、誤たり。くらき眼を定木にして。人を計りし面朴なさ。柏手御せんの真心才智に。誤りを佐る為。二人の子供へ饑別せん。人質の上臈達一人りも残らず御供し。誉れを世上へ顕はせよと。ゆるすに今は母子共赤井ノ介も人々も綱代を遁れし悦びにて。手負をおのく取まはし。皆柏手のお影ぞと。いふに手負はめをひらき。政若都賀若二人の子。赤井ノ介殿。川勝殿。頼むくもだんまつま血死期に廻る玉木の緒。切つてむなしく成にけり。(49才) 兄弟わつとふしまろび。声を限りに泣さけふことはり。せめて道理成。かゝる折しも。弓削の広鷲大いきつゝて馳帰り。扱こそく。我をたばかり敵を引込。人質めら渡さんとはのぶとひ工み。二タ心の川勝め。のがさぬやらぬと切かゝる。抜合せて二打三打。受そんじてかた先を。切れながら広鷲を。大げさに打放し。是て道の氣遣ひなし。人々つれて赤井ノ介。夜明

ぬ中子に行カれよと。柏手御前の。首かき切預る人質落したる。申訳には此首と某が此手疵。長居は無益。実尤と赤井ノ介。子供にこまぐ云合。いひなだむれば合点して。母の亡骸兄弟の。子共がしほく（49ウ）かき上て首なや。はかなや力なや。暁。渡る朝鳥いつも聞より。哀れそふ空もおぼろにめは涙。さらば。くと別る、武士に仁有義有。一つの文のよみ声も娑婆とめいどの恋無常。一つ蓮スの花のうてなになね有。実有情あり武勇の。ほまれ有明の。月夜見日よみ。神の国。柏手か。筆ぞ教成

第三

自 其身を勝てよしと。高慢に乗達東の豕にしゆふが譬たり。守屋の大臣諸国をせたげ。民百性に課役をかけ辞する者に若き女。愛子何（50オ）とを人質に。取所なき悪逆は下の痛としられたり。

渋川村の庄屋年寄五人組を先に立。涙片手に久間平。とほく連立山道中に庄屋が立どまり。ア、手挑燈のお影は有がたい物じや。明りがなけりや鼻つまむも知れぬ。久間平殿御さるか。いはれてしほく曇声。ハイ爰に居まするてや。道々もいふ通娘が預けて置た大事の孫め。二三年以来の年貢の未進に詰つた過料と有つて。水牢に入られ。此様に村の衆が。足手運んで毎日の御赦免願ひ。馴染なりやこそと内へいんでもア、悦んで計。ヲ、そふでござる共。（50ウ）したがきなく思はしやんな。金さへ出来りや水牢は遁れるぞや。イヤノウ庄屋殿。未進の代りに水牢なら。アノ久間平殿入しそな物。孫をうきめにあはすとは。ハテ夫レがあつちの付目じやはい。本主を苦しめては金才覚する者がない。又可愛孫子をせたげると。親は身もよも有ラればこそ。どんなひどい事しても金と、のへるそこが付目。此様に夜々夜中村中が暗もかまはず願ひ

に行も。久間平殿夫婦の衆が。おろくさしやるいとしさ。ソレイノ日頃から憎ぞうのない親仁殿。どふぞけふの願をお聞届有しよ能が。太子様の御領分の内は。(51オ) 棹入らずに畔豆迄がほこへて。村中の若ひ者かいつきく。殊に此世計か。あの世迄。助けてやらふと。世話やかしやましたが科じやといふて。禁中様を追出した。あの悪人の守屋めと。いひ様あたりを見廻し。ア、イヤ守屋様はお慈悲なお人じやないかいのと。庄屋がすべつた口直し。ござれく久間平。組中つれていつきせき。代官所へと急行。

千里の道も一足に。生駒は小づまかいぐ敷。真の闇路も忠孝に。てり輝し胸の月。曇らぬ心頼もしく。

小関が原の山寄を一人とぼく行勞れ。ア、浮世では有はいないア。若宮さまは(51ウ) ちこの人がお供して。渋川村のと同様の所へ。一ト先立退先へ行。女連は目にて跡からいこと。女房の懐には。鬼が住ムやら蛇が住やら尋もせず。ほんに世界の男程水くさい者はないと。うさを紛らす独言。歩む跡からのつさく。望性入ずの商イも人がもてこにやなら坂や。大和河内の境目を踏跨たる大男。三方からふる火繩星か。蛭か疑の立やすらひし。

後にすつくりおてちん庄六蛇の弥蔵。蝮の源何ど、いふ。手だれ達者の悪党仲間。胴より肝の懐手。コレ姉はん送ろかい。送つてやろかどつてう声。ぞつとせしが胸なで(52オ) おろし。ホ、何ぞいな。夜道合点で通る女子。金など持つて居る様な者じやない。邪魔せずと通してと行んとするを猶のさばり。コリヤやかましい鈴ふりめ。べりくとぬかす手間で。懐にあたゝめてけつかる。財布を早ふまき出せやい。イヤくそんな物持つては居ぬぞ。ハテサテ有ルな知ラいで此商売が成物かい。出せいやい。出しおれやいと三人が。金輪にならんでせちがふ難義。

地色ハル きつと心を落し付。イヤ女でこそ有武士の女房。聊爾すると手は見せぬぞ。サアそのいて通さぬかとはいふ物の。叶ぬ用で通る者。どふぞ了簡して下され。ヤ。ヤ。コレ(52ウ)そちらの盗人様。コレこな様は柔和な人そうな。どうぞ能様に侘言して。頼はいのふ。頼ます。頼むといへど馬の耳。風も洩さぬ有様也。

地色ウ 庄六は大欠。ア、ながくくくと。もふこいつ仕廻道具じやはい。ソレく頭ちやつちやと片付て仕廻ハしやれいの。地ウ マア其大ひん手廻れと。つつと寄ッて懐へ。手を指込を払退。か、へしつかと身構への。後におてちんだん平拔。はらりずんど肩口を猪の牙かけに切付られ。わつとのつけに起しも立ず。切やら突やらひしぎるやら。なぶり殺しの念仏料理。さいなむ折から。

地色ウ 孫の願ひの叶はぬと追ッかへされて久間平。(53オ)組中に引別れ一人とぼく帰り足。女の泣声耳際へ。突抜だんびら目の先へ。ぎよつと来かゝる前へ後。跡へも先へも詮方なく。さぐり当し松の木へ。命からく這上り。いきたる心地はなかりける。

地色ハル 下には今はの四苦八苦。はね廻るを打倒し胸腹ふまへて鰻ざし哀はかなき最期也。

地色ウ 三人ごてく死骸片付。コレく頭。何ぼ程持ていたの。ヲ、丁半じやく。イヤコレ蝮とおれがかけて来たのじや。ちつと気を付ケて下されや。ヲ、能様にするはいと。財布しつかり肌引付。ア、いかふ睡と成つたじやないかい。イヤモ(53ウ)小鳥料理じやけれど。生キ者は草臥る。何ぞ祝はれんかいの。ヲ、祝をく。ぼらが所へ火入す二升詔へて置た。

地色ナ 肴も何ぞ有ルである。取ッてきややらふか。ア、こちらがつい往てくるはいの。イヤくわいらは仲間倒しじやによつてほ

らめがおこすまい。取ッてくる中篝かきたいて待て居い。ヲ、そんならそうしよ。大義ながら。親方たのむは。コリヤ〜か
づせき違ハぬわつちやアうはだと追従詞ついでしごう。ヲ、合点と山道を。のこ〜おてちん庄六が。己おのが口にぞつかはれ行。

透透色ハルを見合みあ抜ぬたき親仁。松マツがへに膝ひざわなく。ふるう下にはむか蚣むかのハル弥藏やいざう。蚣げちくをお招まねき寄よ。ナントナント（54オ）ちつと相談さうだんが有が。
是に乗のッたら我も仕合。ヲ、仕合といふ字なら。火水の中へもはいる氣じや。ちやつと咄はなして聞きさぬかい。イヤ外カでもな
い。山も見みずにいつ迄までかふしていた逆さかせんない事。あの頭あたまめぶち殺ころして。今出来た仕事をこつちへぐいとしこだめ。われと
おれとが茄なすび子こわけと。半分はんぶん聞きずにホ、こんだ〜。一文取いちもんてもはつ碓すははつ碓す。われさへ胸むねがすはつたら。戻かへつて酒吞しゆんで居る所を
打うておこ。しやん〜しめし合せてげちくむか蚣むか。こぞり奇あまたる其所しよへ。

ぶら〜酒樽しゆん肴鉢やくはち。持もて戻かへつたおてちん庄六しやうりく。ヲ、頭あたまいかい世話せわ（54ウ）でごんたのふ。何のいやい。ほらが所へいたら。
三日市のぼつたり共がかははつておつた。そこでおれも石五器いしごきで聞きし召またじや。フンそんならもふ吞くはつたか。ヲ、おりや
吞くで来た。ソレ〜わいら是くらへ〜。おつと心得こころえ太郎兵衛たうらうべゑのかまぼこ。見みせて置おけてやるじやと。二人ふたりがさいつ押おへ
の。茶碗ちawanたらはるふく吞く喰く。

庄六しやうりくは煙草たばこすば〜。サア喰くふたらいのふかい。マア先へいかはれの。トリヤトリヤいのふかと行過ゆる。透すきを見合みあせげちく蚣むかよ。蚣むかが
てんと兩人ふたりが。庄六しやうりく中に取込とめてめつたむしやうに切きさいなむ。油断あぶのおてちん先まへとられ。だんびら抜間ぬきまも有あ（55オ）や
なし。無な念ねん〜の聲こゑばかり。のたれ伏ふすうち懐なつかの。財布さいふの金かねはばら〜。弥藏やいざうよひろへ。蚣むかぬかるな手てでにさがす兩
人がぎつくり。〜。目を。白黒しろくろ。ムム、蚣むか何なにとした。イヤ何じやしらぬが。腹はらがうんね〜。上うへを下したへひつくり帰かへるは

い。ハア、くムム、おれもひつくり返る。そして山や並木が。ぐるく廻る様な。おれもまはる様な。ア、く苦し
い。くるしひはいとのつつそつつ。片息のおてちん庄六。ヲ、くるしひ筈。今おのいらが。喰ふた酒は。毒酒じやはい。
うぬらが有ては金設の。邪魔に成によつて。毒酒呑して殺ふと。十が。九つ仕おほせたに。又うぬらに殺されるか。（55
ウ）おりや死でもだんない。金がほしい。ヤアくくそんなら。今の酒は毒であつたか。ハア、そふと知たら吞まい
物。おりや毒呑でも死でも金がほしい。おれも金がほしいはいやい。三人のたくる今はの欲心。物は云ハれず足立ず。自
業自得のうなり声。おほい重り死てげり。

始終を見聞久間平。そろく窺ひ枝つたひ。指覗く。ふるひくも落ちつた。金をこてく財布におさめ。あたり見廻
しく孫が未進を遁る種。天よりあたふる此金と。押いたゞきく飛がごとくに三重へ馳て行。

河内路や洪川村に年を経て。洪ひ親（56才）仁と名に立し久間平が世渡りは。桶や大工のわび住居孫が戻りし祝ひ迎。雑煮
の餅もほたくと。家内賑ふ計也。

此家の養子弥勒の五作。どんざの上に前帯も肝の太きは胴はつて。負て払ふた懐手。内へはいつて立はたかり。母者人。今
戻りました。コリヤヤイ。我もたしなめよ。大事の孫の祝ひに。てつだをふとはせいで。どこをほつて廻るぞい。ハテど
こといふたら。天下御赦免の博奕打つて居たが何と。もとでは呉ぬしはんぼ。六松が未進に出した。大まいの臍繰金。今迄
どこへ隠して置いた。よいく今日は（56ウ）親仁を矢筈にかけてしめてこまそと。髭尻まくつてどつかりと。負腹立る目
の玉は。重一振り出すごとく也。

門地ハルへいそく久間平。庄屋ウを先へ孫連して。ずつと這入ハて顔見合。ヤイ野郎め。方々から詠あつへの水田子たらい盥。輪がへ底入きから。山程仕事はつかへて有。それにけふの闇いそがしき。どこへはいつてけつかつた。サア余り内いそが闇いそがしい。客きやくの有いそにごちくと。桶の輪も懸はたけられまいし。いつそ畑へ。だまれやい。畑へはおれが見廻はたけふた。サそんなら村中へ札に。まだぬかす。村中は孫連て札に廻はたけつて。今戻つた。ほんに夫はたけレよ。庄屋殿の所へ。ア、是々庄屋殿は爰はたけにゐる。テモ扱はたけも（57オ）くくくアノまじくとした頬はたけはいい。儕やうし養子でないと仕様も有はたけど。ア、儘はたけよ。コレお婆ば々々。忍はたけぶが見へぬどつちへぞ。サイノ六松が大事の祝はたけひ。牛もこつちの奉公人。草はませにやりましたと。聞地ハルより五作はたけがほんに夫はたけレよ。こちの牛はたけはゐるはい額びたいじやげな。夫はたけなら大地ハルきな金はたけに成。一寸と見てこふと立上はたけるを。ヤイく待はたけおれ。又おのれ忍はたけぶをなぶるでな。ヲ、親仁殿はたけそりや違はたけはぬ。あの忍はたけぶは。おれが里からの預はたけり者。ヲ、サく。指ゆびもさ、せるこつちやない。奥地ハルへうせふとかみ付はたけられ。うごく立ウて牛部屋ウを。尻しり目に懸ウけて納戸口なすまひ鼠舞ねずまひして入ウを見て。とつとわらふた（57ウ）き色をい口地色ハル。庄屋殿餅餅は。イヤく。とち兵衛が所地色ハルで。茶漬ちやくした、か。そんなら酒を。ヲ、コリヤ嬉地色ハルしひは尤。祝地色ハルひ事に一地色ハルぱいしよ。大地色ハルまいの金拵せへたはこなたの情力せい。マどふして出来たや但せいしれこやつたじやないか。サア。生せいきる瀬せか死せいる瀬せか。毎日まい泣せいぬ日せい迎せいもなく。娘せいの駒せいを都方せいへ。奉公ほうこうさせて置せいた内せい。去せいル侍せいと念頃ねんころして。産うむと直せいにこつちへ預せいる大事せいの孫せい。智ちの方地ハルへ金せいの無せい心に状せいやつても。手取てぬ内せいは当せいにならぬ金事せい。カ案かじたより安せい々と金せいおこして呉せいたゆへ。余せいりく嬉せいして。嬉せいし涙せいがこぼれると。声せいふるはせば六松せいが。ば、様抱やまてと取付せい顔せい。マアく此せいぶ（58オ）きくとした孫せいを。すでの事せいにあつち者せい。こわやく親仁殿せい。ヲ、お婆ばのいやる通せい。孫一人拾せいひました。ヲ、此庄屋も懸せいり合せい。めでたい酒せいじや

是で廻そ。ヤあたまから茶碗か。コリヤ見事。しづかに参れと挨拶も。ふうふほたく悦び笑ひ。やかましいのが在所也。暮かゝる。遠寺の鐘の。ねに戻る。鳥の空音のはかなきは生駒が故郷したひ寄。姿おぼろの軒深く。頼ませふくといふ声が。耳につき抜親子の縁。ソレ哀に頼ましよが有はいの。ハテ小めんどな。たれじや。こちへはいらしやれ。そんなら御免と入顔は。ヤア娘のお駒じやと。いふに親仁も（58ウ）箸取落し。ヤレお駒かよふ戻つてくれたなア。此頃つゞけて夢に見たで案じたが。マアくまめで。無事で。達者で。モ、何やらかやら云たい事が。かきたくる程まだ有く。ヲ、ソレく孫めも大キう成おつたと。余ねんなき親の顔。見るめに涙押包。お前方にも此子にも。ま一度逢いたいくと。少中の隙もらひ。ヲ、そふで有く。コレ庄屋殿。嬉しい事が重て。尻がひよこく踊ます。ヤ旅づかれやら色が悪ひ。酒呑ぬか。イエく。何にも恣はござんせぬ。ヲ、歩いて来ていつきには喰れまい。奥でマア気を休めや。ヲ、夫レ々。六まよ。か、連て早ふ行。アイそんなら左様に。どこぞ仏檀の有一ト（59オ）間へと。何の気色もなき魂の。我子を連て奥の間へ後の哀を隠し行。

地色ハル村のあるきがあはた、敷。庄屋様爰にか。ちやつと内へござりませ。聖徳太子を厳しい詮義。又再触が参りました。其上産神様の人身御供がけふでござりますといの。ヤアそりやなぜ俄に今日に成つたの。サア祢宜殿が昼寝さしやつた夢しらせ。夫レで俄に。ヲ、そりやもふ大ていのこつちやない。道理でアレ。あの西の方の光る事追ッ付ぬける程ふつて大雷の鳴そな気色。ア、所も多ひに此渋川郡の産神は。棕（59ウ）の木原の棕の洞から出やしゃつた蛇神じやげな。年に一度つゝ。七字を取て嘯しやる。夫レも月日なと極つて有れば。前広に用心もなれど。今日の様にいつ逆も俄事。人身御供備へねば。

村中が滅却すると昔からの云いふらしで。矢の当った家の子は。村中寄って笑止ながら人身御供につれて行。是の六も七つ子。切角水牢のがれたに。人身御供の用心めさ。おら、もゐんで鼻たれが。顔を見よふとおぢ恐れ小あるき連て立帰る。コレ婆、あんじやんな。こちの孫計は。人身御供の氣遣ない。夫れはどふして。ハテ有(60才)難いお方が。ナ。合点か。ヲ、夫レ々。水牢通れたも其お影。夫レでむねが落付た。ヲ、都人に成った娘。田舎料理はきたなかる物。おれは裏の漚で嫁菜摘でしたし物。釜の下焚付やと。裾はせ折て子を思ふやみによき漚へ行。母は料理の拵に入さの。月の雲隠れ。御痛はしや。聖徳太子。久間平にかくまはれ。女姿に名を忍ぶ馴も給はぬ御手業右に糸籠左には昨日の御車引かへて。今は御身に引つなの牛の冥加や恐れ有。綱たぐり寄草おろし。実や母皇后丸を懐胎の臨月。馬屋の辺り(60ウ)にて誕生したるを。厩戸の皇子と呼しが。今又牛の綱を引。現在の果は過去未来牛馬に縁を引よなふ。御父用明天皇は。玉世の君を恋給ひ。御名をさんろと身をやつし。野飼の牛に縁の綱。今に競て曲者の恋はほだいの種ぞとて。悟の種もなき草を牛に。あたへておはします。

いつか後に見とれる五作。幸あたりに人はなし。そろく寄てほうと抱。コリヤ忍ぶ。日頃の思ひはらしてくれな。ヤどふだ氣は中橋か。是さくく物いひな。ア、なぜ其様につらゐぞや。コレ二度とはいはぬ。たつた一度。夫れがいやなら半分と。涎れ(61才)だらくくとろくく目。牛よりも猶見くるしき。エ、いやらしい。そんな事は嫌ひじやいな。そんならちよつと口計。エ、しつこいいやじやく。ハテ。ちよつとくくに懐へ手をさし込ば男の乳。はつと計に母は立出もぎ放し。ヤイ爰なのら者め。モよいかげんがよかるがな。イヤコレ母者人。あんまりがいくとやかましい云ハしやんな。おれは爰

久間ハツト心付。最前又代官所より。御有家を尋るきびしい触。其上庄屋がいつにない長咄し。今盼の悪ル者めがそぶり。
彼是思ひ合すれば。もふ爰には置まされぬ。紀の路は中臣勝海様の御領分。頼んで御身を忍ばせ（63才）